西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第１０集

中　原　遺　跡

（中原城跡）

県営農地保全整備事業（岩郷原地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

１９９０・３

宮崎県・西都市教育委員会

序

西都市教育委員会は、宮崎県中部農林振興局の委託を受けて、県営農地保全整備事業（岩郷原地区）に伴う発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査結果の報告であります。

調査の結果、縄文時代早期の集石遺構をはじめとして、同時代の土器・石器、さらには弥生土器・土師器等が出土し、古来より先人がこの地に住み、生活していたことが判明しました。また、今まで不明な点が多かった土塁・堀跡等についてもある程度明確にすることができました。

この報告書が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されると共に、埋蔵文化財に対する理解と認識が得られれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた県文化課・中部農林振興局関係機関をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心から厚く御礼を申し上げます。

平成２年３月３１日

西都市教育委員会

教育長　平　野　　平

例　　言

1．本書は、県営農地保全整備事業（岩郷原地区）に伴い、平成元年度に実施した中原遺跡（中原城跡）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、中部農林振興局の委託を受けて、西都市教育委員会が実施した。

3．調査組織は、次のとおりである。

調査主体　西都市教育委員会

教育長　平野　平

社会教育課長　清　郁男

同文化財係長　黒川忠男

調査員　日高正晴（西都原古墳研究所長）

緒方吉信（同　嘱　託）

蓑方政幾（主　　事）

調査作業員　篠原時江・黒木トシ子・緒方タケ子・久保田要子

長谷川クミエ・藤原秋子・長友敏子・籾木美千代

久保田美千代・後藤佐和美・後藤由貴美・清守夫

関谷邦男

遺物整理員　関谷憲子

4．本書に使用した図の作成・編集は蓑方が行った。

5．本書第1章第2節は緒方が執筆し、その他は蓑方が執筆した。

6．本書の遺物実測は、関谷と蓑方が行った。

7．土層・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。

8．本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

本文目次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
　第３節　調査の概要 …… 6
第２章　遺構と遺物 …… 7
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 7
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 27
　第３節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 27
第３章　まとめ

挿図目次

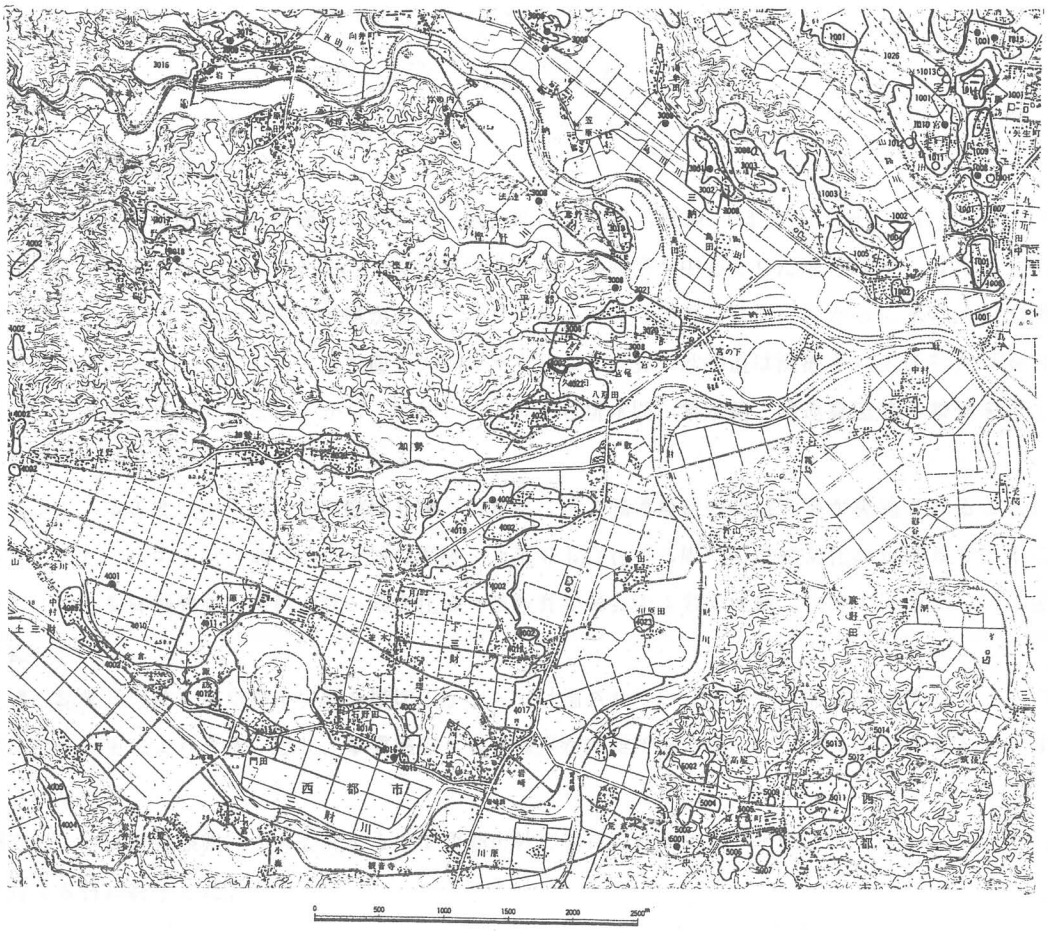
第１図　中原遺跡位置図 ……
第２図　中原遺跡発掘調査区域図 …… 4
第３図　Ｂ地点遺構分布図 …… 5
第４図　土抗及び１号・２号集石遺構実測図 …… 8
第５図　３号～６号集石遺構実測図 …… 9
第６図　７号～１１号集石遺構実測図 …… 10
第７図　Ｂ地点縄文時代遺構・遺物分布図 …… 13
第８図　出土土器実測図・拓影（縄文時代） …… 17
第９図　出土土器実測図・拓影（縄文時代） …… 18
第10図　出土土器実測図・拓影（縄文時代） …… 19
第11図　出土土器実測図・拓影（縄文時代） …… 20
第12図　出土土器実測図・拓影（弥生時代） …… 21
第13図　出土土器・石器実測図及び拓影（土師器・須恵器・青磁・石器） …… 22
第14図　Ｂ地点帯状の遺構実測図 …… 28
第15図　Ａ地点平面図 …… 29
第16図　Ａ地点土塁（東西）及び堀跡（トレンチ）断面図 …… 31
第17図　Ａ地点土塁（南北）及び堀跡断面図 …… 32

表 目 次

表１　縄文土器観察表 …… 23
表２　弥生土器観察表 …… 26

図 版 目 次

図版１　Ａ地点遠景・近景、堀跡・土塁・集石遺構検出状況 …… 39
図版２　Ｂ地点近景、礫群・集石遺構検出状況 …… 40
図版３　Ｂ地点集石遺構検出状況 …… 41
図版４　出土遺物 …… 42
図版５　出土遺物 …… 43



遺跡番号	名称	所在地	時代
1001	西都原古墳群	大字三宅・妻・童子丸・右松	古墳
1002	清水西原古墳群	大字清水・三宅	古墳
1003	上ノ原遺跡	大字清水字上ノ原寺山	古墳～平安
1004	寺山遺跡	大字清水字寺山	古墳
1005	清水遺跡	大字清水字大師・松崎・妻久原	弥生～古墳
1006	下尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東下・尾筋西下	弥生～平安
1007	上尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東上・尾筋西上	弥生～平安
1008	日向国分寺跡	大字三宅字国分	奈良～江戸
1009	国分遺跡	大字三宅字国分・大字右松字鶴田	縄文～江戸
1010	上宮遺跡	大字三宅字上ノ宮東・上ノ宮西	弥生～平安
1011	上宮古墳	大字三宅字上ノ宮西	古墳
1012	上宮城跡	大字三宅字上ノ宮西	中世
1013	三宅城跡	大字三宅字原口	室町～安土桃山
1014	諏訪遺跡	大字三宅字毘沙門・大字右松字鶴田	縄文～古墳
1015	酒元遺跡	大字三宅字須先・冠貫畑・山王前畑	弥生～江戸
3002	松本遺跡	大字三納字松本・戸町田中	古墳

遺跡番号	名称	所在地	時代
3003	松本原遺跡	大字三納字松本原・羽子田・大字清水字宮川・仙敎・孫木下	縄文～古墳
3004	長野原遺跡	大字三納字長野原	縄文～古墳
3005	永野遺跡	大字三納字常圓・永野・宮田	弥生～古墳
3006	鴨目原遺跡	大字三納字鴨目	縄文～江戸
4001	常心塚古墳	大字上三財字常心原7831	古墳
4002	三財村古墳群	大字下三財・上三財・加勢	古墳
4003	元地原遺跡	大字上三財字元地原	古墳
4004	中原遺跡	大字上三財字中ヶ原	縄文～古墳
4005	小野城跡	大字上三財字中ヶ原	中世
4006	當野遺跡	大字上三財字當野	弥生～古墳
4007	棧敷野遺跡	大字上三財字棧敷野	縄文～奈良
4008	水喰遺跡	大字上三財字上之原	古墳
4009	中村遺跡	大字上三財字中村	古墳～江戸
4010	常心原遺跡	大字上三財字常心原・金倉上	弥生～古墳
4011	外原遺跡	大字上三財字下外原・西宝来	古墳～平安
4012	諏訪遺跡	大字上三財字諏訪	古墳～平安

遺跡番号	名称	所在地	時代
4013	門田遺跡	大字上三財字門田前田・北水戸	古墳～平安
4014	石野田遺跡	大字下三財字石野田屋敷・外圓	弥生～平安
4015	石野田城跡	大字下三財字古城屋敷	室町～安土桃山
4016	石野田古墳	大字下三財字外圓	古墳
4017	宮迫遺跡	大字下三財字宮迫	古墳～江戸
4018	亀塚遺跡	大字下三財字亀塚屋敷・亀塚	弥生～古墳
4019	前原遺跡	大字下三財字外圓・中別府	弥生～江戸
4020	加勢遺跡	大字加勢字南圓・宮圓	弥生～古墳
4021	久米田遺跡	大字都字上地・中圓・外圓・竜之内・大字加勢字城ノ上	弥生～室町
4022	尾能遺跡	大字加勢字尾能・森木	弥生～室町
4023	光台寺遺跡	大字下三財字川原田	室町～江戸
5001	都於郡村古墳	大字荒武367乙	古墳
5002	都於郡城跡	大字廣野田字高屋	室町～江戸
5003	岳惣寺跡	大字荒武字都於郡	縄文～江戸
5004	大中寺跡	大字廣野田字高屋	室町～江戸

第1図　中原遺跡位置図

第一章　はじめに

第一節　調査に至る経緯

西都市の南西端で国富町に隣接している中ヶ原台地は、通称岩郷原（ほとんど国富町に含まれる）と称されている地区に含まれている。その岩郷原地区は、菜園芸を中心とした畑台地で、ほ場も一応整備されているものの排水施設の考慮がなかったため降雨時には両側の壁面に向かって水の流出が激しく、それに伴って土も流出し、また崖面の陥没等も起こり、更に砂利道は洗掘され生産物及び資材の搬入出に不便な状態であることから、昭和５３年度から排水路・集水路・関連農道等の整備を中心とした農地保全整備事業が実施されている。

その中で、本年度は中ヶ原台地を横切り眼下の集落に至る関連農道の新設工事が実施されることになった。しかし、中ヶ原台地は、中世城の堀跡・土塁等も存在する周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、中部農林振興局・市耕地課・県文化課・市教育委員会の４者で埋蔵文化財の保護について協議を重ねた。

協議の結果、堀跡・土塁の中央部を横切るかたちで計画されていた事業も中部農林振興局サイドの大幅な計画変更により合意に達し、事業施工上現状保存が困難である部分について事前調査を実施することになった。

調査は、中部農林振興局から委託をうけて西都市教育委員会が実施し、平成元年７月４日に着手し、１０月１８日に終了した。

第２節　遺跡の位置と歴史的環境

西都市の南端部に広がる三財平野は、九州山地の麓から東方に細長く、南辺に国富町の岩郷原等洪積世台地、北辺に小豆野原台地と両台地に挟まれ、東辺の都於郡台地によって北方に急曲するＬ字型地形の水田地帯である。

三財平野から岩郷原に上るには、同台地の北麓に所在する岩井谷集落から、谷間に開かれた坂道によって通ずる。

この坂道の谷間が、途中急曲して右方に転じ、東側に字地中ヶ原の丘陵を形成して岩郷原と分割されている。

標高およそ１２０ｍの中ヶ原台地は、三財平野と小豆野原の常心塚古墳等を眺望し、中世城跡としても周知の台地である。

現在、岩郷原から分岐した地点から約１５０ｍを小野城跡と称し、中原城跡とは区分して呼称されている。

字地の中ヶ原は、この中原城跡によって中ヶ原となったものであるが、概略南北に長く縦約３７０ｍ・横幅約１２０ｍの平坦地形を成した畑作地である。

この地に、領主、築城者等は不詳であるが、中世に山城が築かれ、今も堀跡・屋敷跡等の城跡が確認され、さらに一隅には近年まで古寺跡も残されていた。

昭和６０年度西都市は、国県の補助を得て遺跡の詳細分布調査を実施した。このとき中ヶ原からは、縄文土器片１９点・弥生土器片１８５点等の表面採取遺物があり、地形的にも古代遺跡の包蔵される可能性は極めて高いとした。

小野城跡は、岩郷原との接点部が約１．５ｍと高く作為され、さらに中ヶ原との境界には長さ約２５ｍ、幅約５ｍ、深さ約３ｍ、並びに長さ約１５ｍ、幅約４ｍ、深さ約２ｍの２条の堀跡が残され、ここまでを小野城跡と称している。

しかし、主城域は中ヶ原であり、中ヶ原を古くから中原城跡と称していた。そこで現在称される小野城跡は、中世・中原城の追手門部であったと考察される。

全長約５００ｍに及ぶ中原城跡は、西方及び南方の自然の峡谷も深く、外堀となって防護の役割を果し、東方は三財平野を足下に置き、急な断崖となって人踏を許さぬ地形を成している。

室町時代、足利尊氏の智将伊東祐持は、建武２年（1335）日向に下向して都於郡城を築き、正平３年（1348）７月、検非違使の要職にあり上洛中京都で没する。

祐持の嫡男虎夜叉丸は、祐重と改名して都於郡に下向してくるが、これを伊東氏親子２代の日向入りと称し、曲折はあったものの祐重が都於郡２代城主となる。

これより先、つまり建武元年（1334）に、建武中興を成就した後醍醐天皇は、足利尊氏の擁する北朝に追われ、吉野に移って南朝を開かれ、国内は再度乱れて約６０年間、争乱の南北朝時代となる。

当時の日向国は、県北の土持氏、中央の伊東氏、県南の島津氏と三大勢力によって分断されていた。そのうちの伊東氏と土持氏とは共に北朝方に組し、島津氏は、本流は北朝方であるが、形勢によっては南朝方とも組していた。

この三大勢力にも抗し、終始南朝方として北朝方に反抗したのが、八代の伊東祐広と高城の肝付兼重であった。

この争乱の時代に、年令は不詳であるが幼年城主として伊豆国から日向国へと下向したのが伊東祐重であり、祖父の弟祐㷊と父の弟祐藤との間に、都於郡城後継者としての相続争いも下向前に起っていた。

この争いは、祐重が幼少であったことから、祐㷊が相続者となり、祐㷊没後に祐重相続との裁断が下された。

しかし、祐㷊が下向の途中周防灘に於いて遭難死した事から、祐重が急に都於郡２代城主として迎へられることとなる。

ところが、初代祐持没後、相当の長空白期間伊豆国での相続争いが続いた事から、南朝方の伊東祐広の子森永祐氏が都於郡城を押領していた。

祐重を、京まで迎へに出向したのは、山田、荒武、津留、大脇等地元の重臣たちで、祐重一行が到着しても祐氏は城を明ける意志がない。そこで一族間の争い事を避けるため、山田氏が山田の池ノ房へ一行を案内した。

「日向記」によると、その後祐重は中原城へ移ったと記される。この中原が現在の字地中ヶ原であって、この城で時の移るを待つこととなる。

その時期は詳らかでないが、相当の時間を費やして祐氏とも合意に達し、祐重の都於郡入城が成立する。

ところが、祐持の下向とちがい、祐重の下向は伊豆の一族が大挙しての入来であって、都於郡城の貧弱さから、時世に合した城の大改築を図らねばならなかった。

風雲急を告げる南北朝の争乱期、一族や身の安全を図る為にも祐重は、堅固な中原城を采配地とし、さらに石野田に小城を築き、都於郡城を掘指の城として完成させた。

中原城跡の直下には小野集落があり、今も「小野上り」という言葉を耳にする。小野城跡の入口には、「八大竜王」の雨乞碑が建っている。

この碑は、昭和９年建立の碑であるが、古くからこの地では旱魃の時の雨乞い祈祷が行われていた。雨乞いのとき、村人たちは蓑笠を着用して鉦をたたき、行者はほら貝を吹いて坂道を上る。

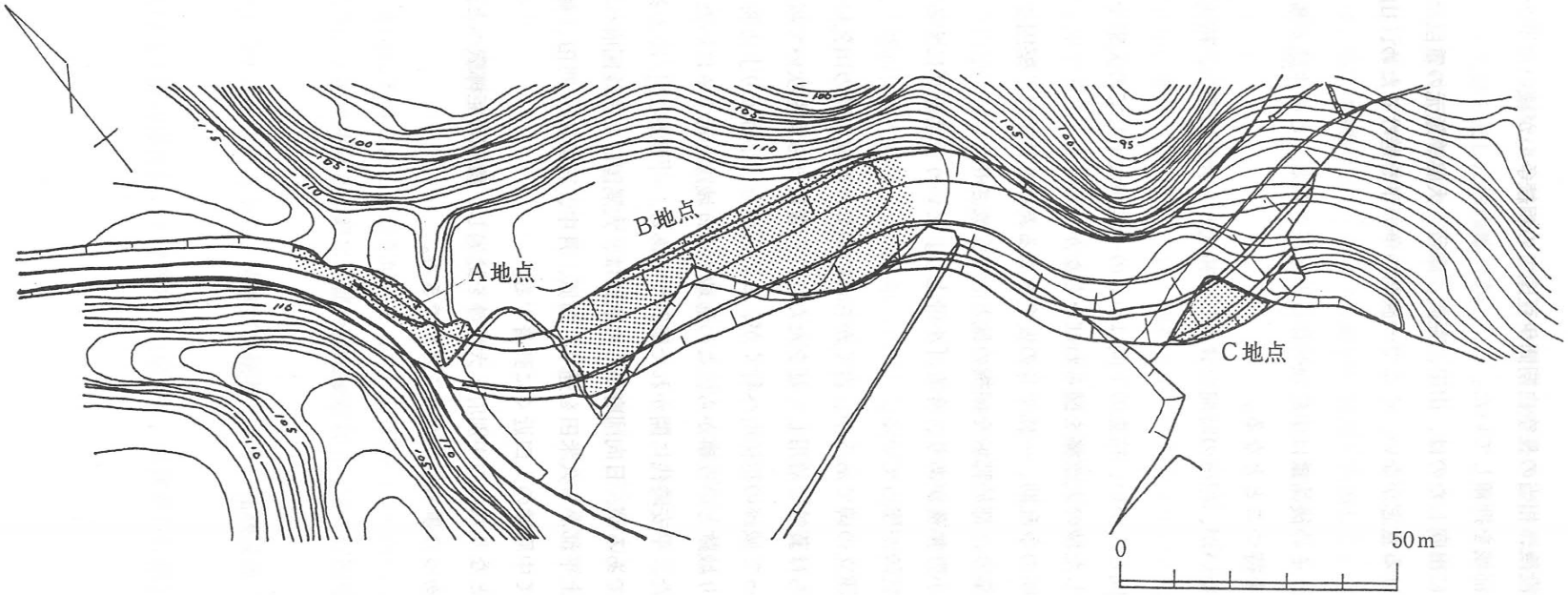
このとき、坂道を上って城跡の祈祷所へ行くが、この行列を「小野上り」と称するものであり、場所が中原城の追手であり城跡という事から、この地域を小野城跡と称するにいたった。

小野上りの坂道はまた、平安時代に開かれた駅路でもある。「延喜式」による日向１６の駅名は、広く周知されるところであるが、日向国府からの駅路は、大隅国府と肥後国府へと分岐する。

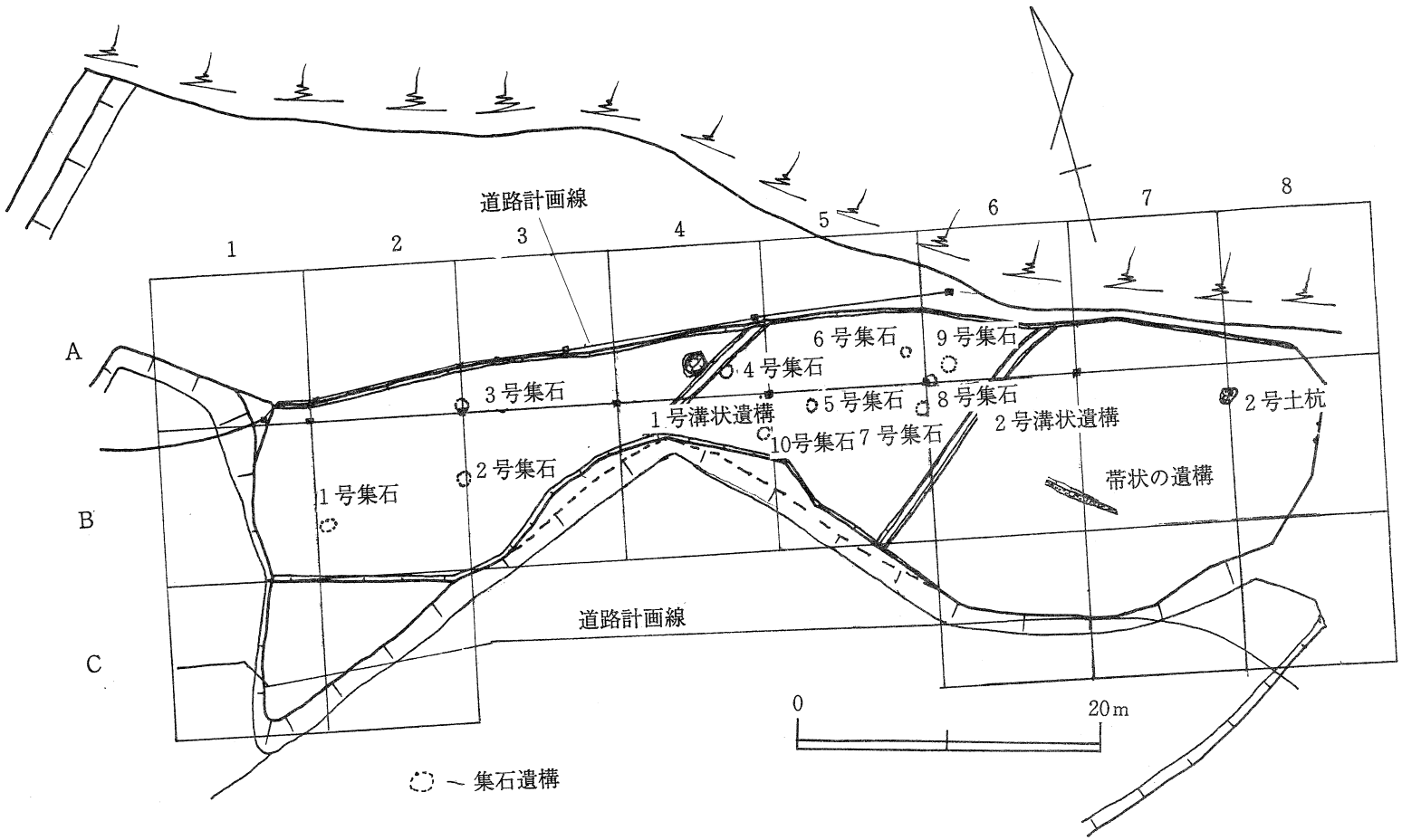
肥後国府への道は、上平郡から久米田を通り、前原、月中、石野田、門田、諏訪、小野へと進み、小野上りの坂道を上って中原城の入口近くに到着する。

ここからは、国富町となり八代の中別府・大坪等を通過し、綾町の亜椰駅へと通ずる。中原城跡は、当時から重要な地域であった事もうかがうことができる。

（緒　方　吉　信）



第２図　中原遺跡発掘調査区域図



第3図　B地点遺構分布図

第３節　調査の概要

調査の対象になったのは、中ヶ原台地の西端のくびれ部に位置する堀跡・土塁の一部分とその東側台地及び台地北部の一段高いところの３ヶ所で、西側より順次Ａ～Ｃ地点とした。

調査は、まずいちばん面積の広いＢ地点より始めることになり、各所にトレンチを入れ土層及び遺構の残存状況等を確認し、その結果をもとに、重機により表土を剥ぎ本格的な調査に入った。

次に、Ａ地点の調査に入り、新設農道によって削平される土塁については全面、堀部分については縦横にトレンチを入れ土層及び規模等の確認を行った。

最後に、Ｃ地点の調査に入ったが、Ｃ地点は、一段高いもののすでに削平されていることから、まず、遺物・遺構の残存状況を確認するためのトレンチを入れた。結果、削平された当時雑木等を２ｍ程掘って埋めたらしく全体的に攪乱されており、遺構の確認はできなかった。よって、Ｃ地点については、トレンチ調査の段階で調査不可能と判断し、調査を終了した。

調査の結果、Ａ地点では、土塁が盛土ではなく自然の地形を利用して造られていたこと、また、堀は大小３重になっていたこと等を確認した。

Ｂ地点では、縄文時代早期の集石遺構１０基をはじめ、土坑・溝状遺構及び帯状の遺構が検出された。遺物は、縄文土器を中心に弥生土器・土師器等が出土した。

これらの詳細については後述するとして、土塁・堀部分についてある程度明確になったこと、集石遺構が計１１基も検出されたことは大きな成果である。

第２章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１．遺構

縄文時代の遺構は、Ａ地点より集石遺構１基、Ｂ地点より集石遺構10基が検出された。いずれもアカホヤ下層の黒褐色土層より検出された。

これら集石遺構のうち１号～１０号集石遺構は、アカホヤ層を剥いだ段階で全面的に礫群が出土し、見分けることがむつかしかったが、この礫群を取り除いてみて集石遺構を確認することできた。また、１号～１０号集石遺構は堀込みを有するが、１１号集石遺構については、堀込みを確認できなかった。

１号集石遺構は、Ｂ地点Ｂ－２グリットより検出されたもので、直径　１・１ｍの円形プランを呈している。

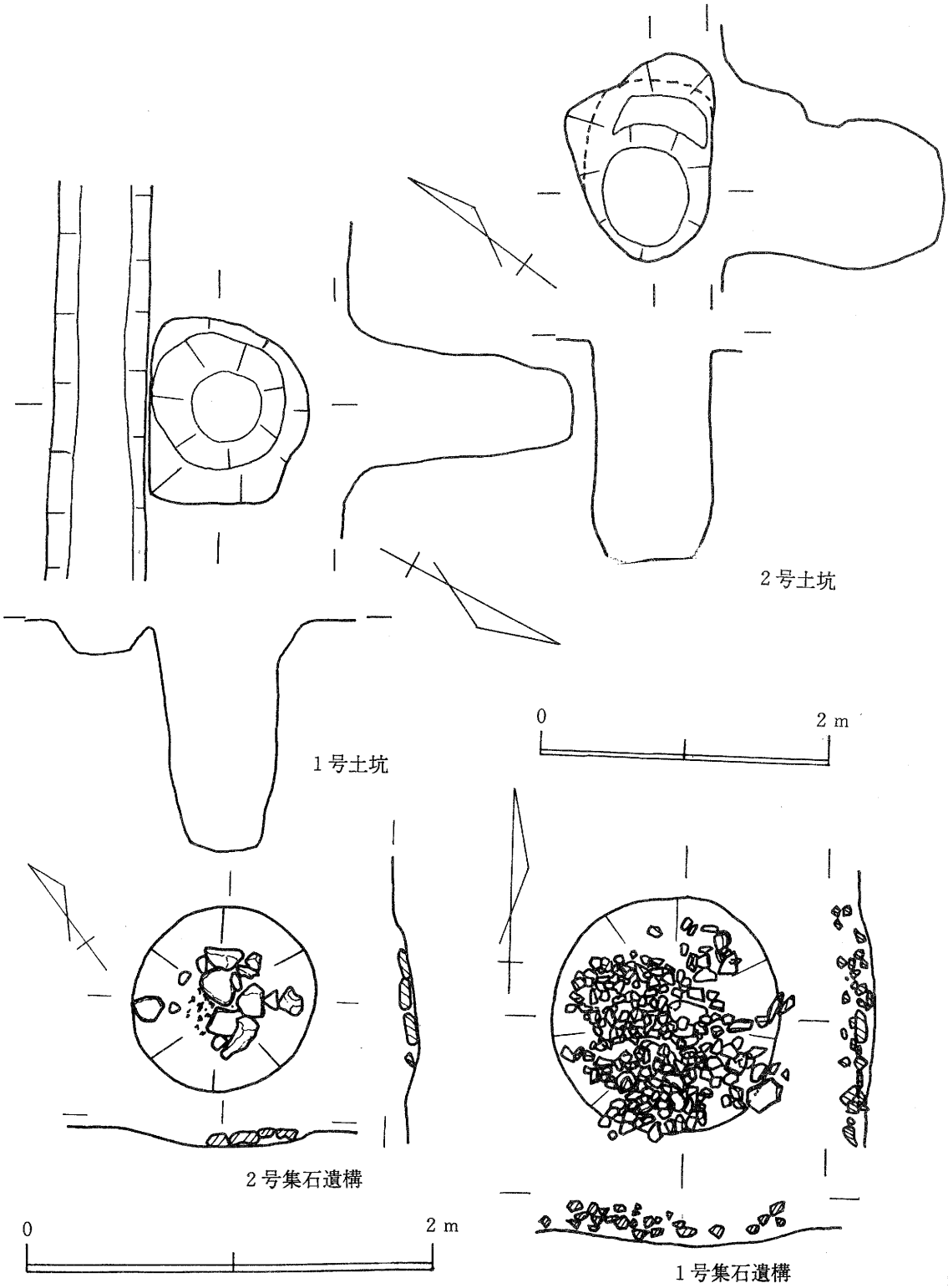
２号・３号・５号・８号集石遺構は、いずれも上部が削平されており、特に２号・３号・８号集石遺構は堀込みの底部に長さ２０㎝前後の石とわずかに焼石が検出されたのみである。５号集石遺構はわずかではあるが上部に焼石が集石され、堀込みの底部に拳大の石を配していた。規模は現存している段階で２号集石遺構が、直径０・９ｍ深さ０・１ｍ、３号集石遺構が、直径０・７ｍ・深さ０・１５ｍ、５号集石遺構が、直径　０・９ｍ・深さ０・１５ｍ、８号集石遺構が、直径０・８５ｍ、深さ０・１５ｍでいずれも円形プランを呈している。

４号集石遺構は、Ｂ地点中央部Ａ－４グリットより検出されたもので、直径１・０５ｍ・深さ０・２ｍの円形プランを呈している。堀込み内には焼石が無規則に集積され、また、２号・３号集石遺構のように堀込みの底部には石は配されていなかった。

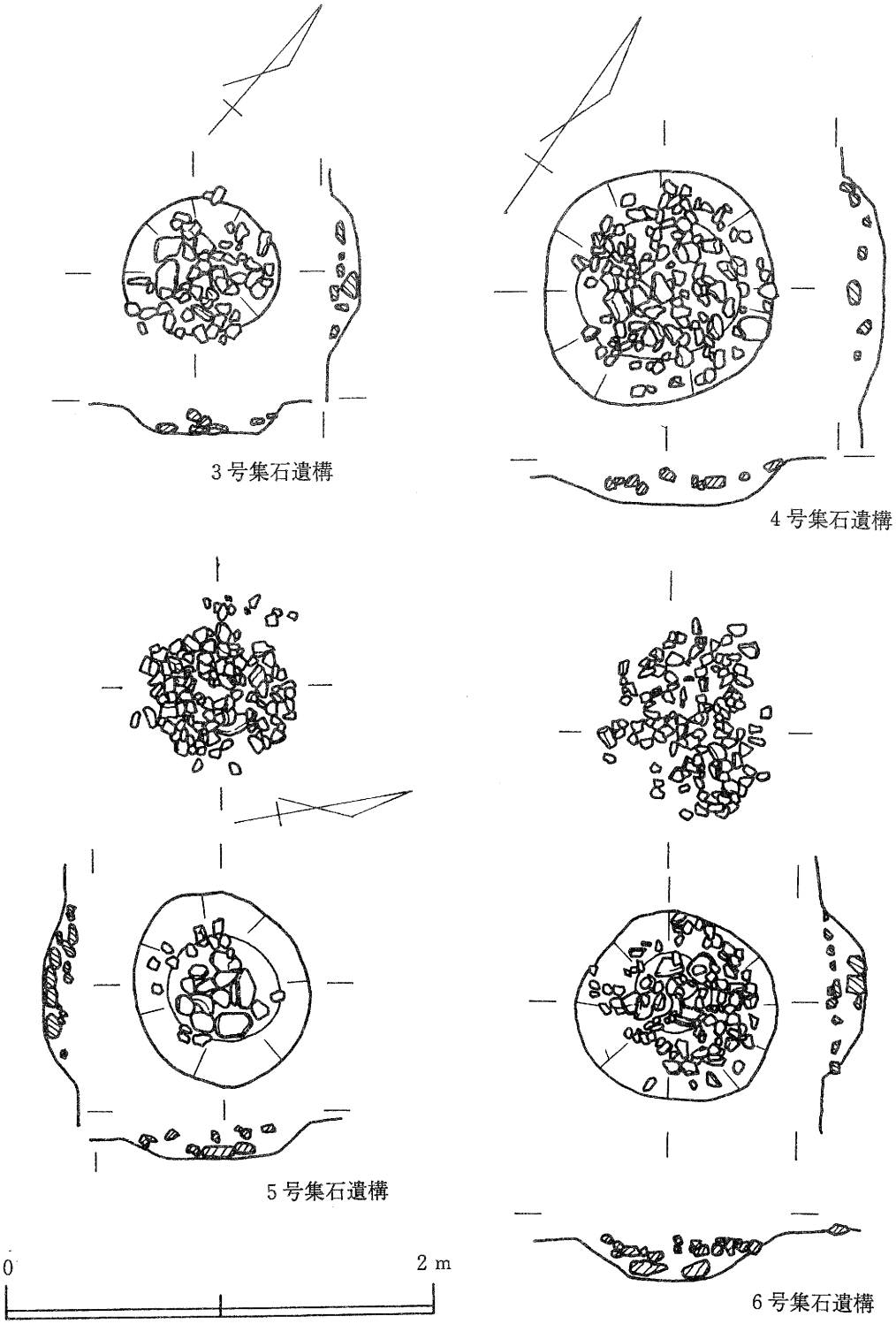
６号集石遺構は、Ｂ地点Ａ－５グリットからで、直径０・９ｍ・深さ０・２３ｍの円形プランを呈している。堀込み内には焼石が無規則に集積され、堀込みの底部には長さ２０㎝前後の焼石を５固配している。

７号集石遺構は、Ｂ地点Ｂ－５．６グリット・８号集石遺構の南側で、直径１・１５ｍ・深さ０・４５ｍの円形プランを呈している。堀込みは２段状になっており、上部には無規則に焼石を集積し、底部には２５㎝前後の焼石を花弁状に配している。

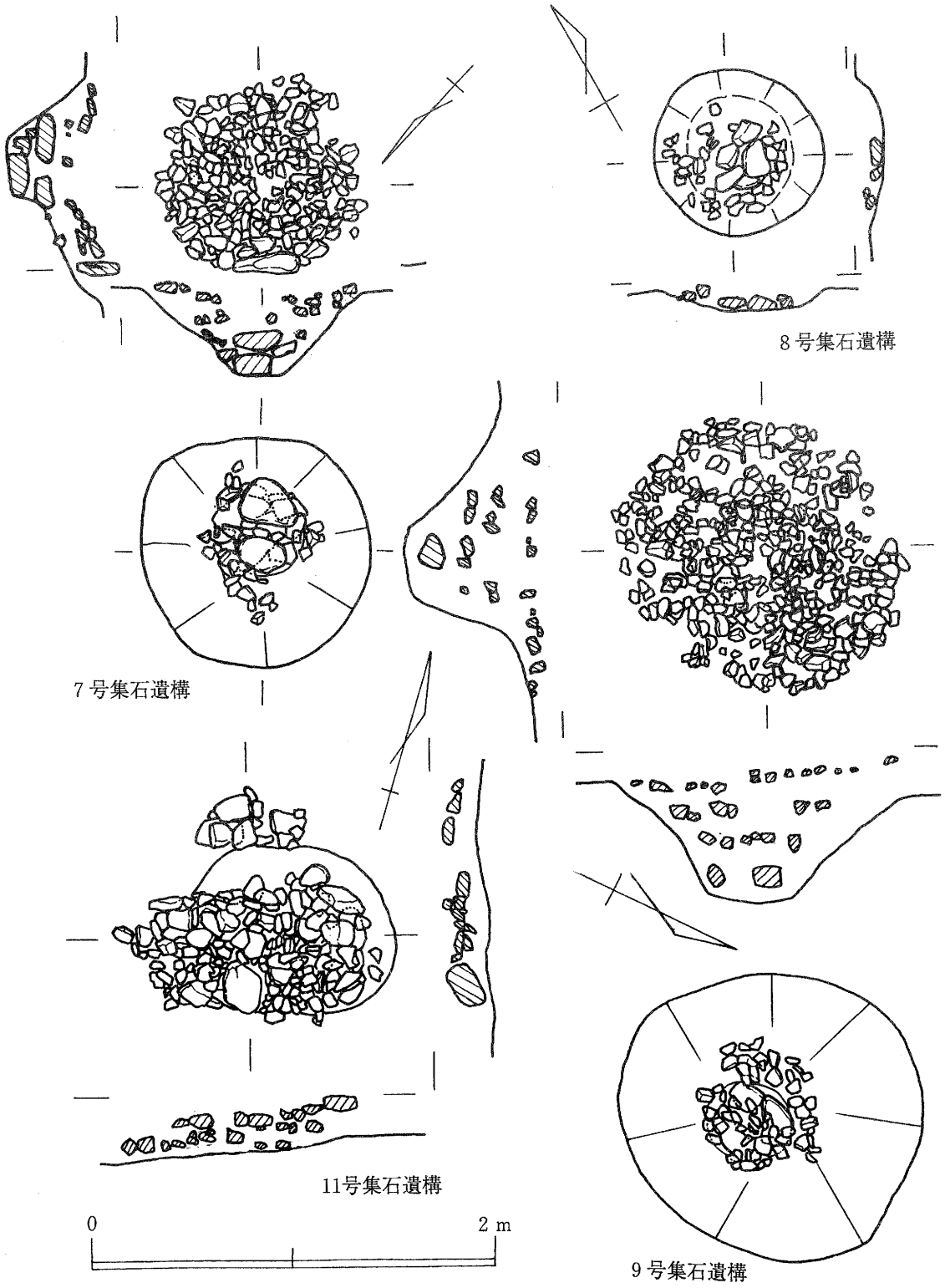
９号集石遺構は、Ｂ地点Ａ－６グリット・８号集石遺構の北側で、中原遺跡では最大の集石遺構である。直径１・５ｍ、深さ０・６ｍの円形プランで、堀込み内には上部０・４ｍ程に焼石を集積させ、底部には３０㎝前後の焼石を３個配している。



第4図　土坑及び1号・2号集石遺構実測図



第5図　3号～6号集石遺構実測図



第６図　７～１１号集石遺構実測図

１１号集石遺構は、唯一Ａ地点から検出されたもので、直径１・３ｍ程の円形プランと推定される。堀込みは確認できなかったが、底部の土が直径１・１ｍ程黒く焦げていた。

２.遺　物

縄文土器（第８図～第１１図）

縄文土器は、Ｂ地点からがほとんどで、アカホヤ層上位で曽畑式土器・アカホヤ層下位で押型文土器・塞ノ神式土器・平栫系土器・貝殻条痕文土器・貝殻腹縁刺突文土器・網目状撚糸文土器が出土している。全体的な点数は４００点程で、比率的には塞ノ神式土器（３３％）及び押型文土器（３０％）が多く全体の６３％を占めている。以下、曽畑式土器13%・貝殻条痕文土器６％・貝殻腹縁刺突文土器３％・網目条撚糸文土器２％・平栫系土器１％、そして破片があまりにも小さく判断がつきにくい不明土器を含んだ無文土器１２％である。

なお、縄文土器については、第７図にドットを落とす作業を行っているが、全体的にはＡ－３．４・Ｂ－３．４グリットに集中している。主な形式では、押型文土器が全体的に、塞ノ神式土器がＡ－３．４・Ｂ－３．４グリットを中心に全体に、貝殻条痕文土器がＡ－３．４・Ｂ－３．４グリットに、曽畑式土器がＢ－２グリットを中心に分布しているようであるが、はっきりとした区別はできない。

さらに、これらの土器群は、レベル的にもほとんど差異がなく、レベルによって相互関係等を考慮するのはむつかしく、本報告では文様等により細分するのみに留まった。これら土器の個々の特徴については、観察（計測）表を付した。

貝殻条痕文土器（第８図１～３）

貝殻条痕文土器は全体の６％で、点数でいうと２０点程である。１は貝殻腹縁による刺突を口縁端部に連続に施している。２・３は胴部破片で斜方向に貝殻条痕をほどこしている。文様及び器形等から前平式土器と判断される。

押型文土器（第８図４～１７）

押型文土器は、楕円押型文土器（Ⅰ類）と山形押型文土器（Ⅱ類）に大別できる。本遺跡の主体をなす土器形式の一つで、礫群に伴って出土している。比率的には、楕円押型文土器７２％・山形押型文土器２８％で、圧倒的に楕円押型文土器が多い。

Ⅰ類　楕円押型文を施す土器群で文様・器形から５つに分類できる。

Ⅰａ類　小型の楕円押型文を施す土器で、口縁部が若干外反している。口縁端部はベルト状に文様を施さず(無文)、内面に原体条痕を有し、以下楕円押型文を施すもの。(４～６)

Ⅰｂ類　口縁部が若干外反し、内面に原体条痕を縦位に施すもの。
文様は外面のみ施されている。（７・１２）

Ⅰｃ類　口縁部が若干外反し、外面及び口縁部内面に楕円押型文を施すもの。
施文方向は、外面が縦位、内面が横位である。　（８）

Ｉｄ類　口縁部が大きく外反し、外面に縦位の楕円押型文、口縁部内面に長大な原体条痕を斜方向に施すもの。（９）

Ｉｅ類　口縁部が大きく外反し、口唇部に大きな刻目を施し、外面及び口縁部内面に楕円押型文を施すもの。施文方向は両面とも横位である。（１０・１１）

Ⅱ類　山形押型文を施す土器群で、文様・器形から４つに分類できる。なお、山形押型文の底部が１点出土しているが、尖底である。　（１８）

Ⅱａ類　小型の山形押型文を施す土器で、口縁部が若干外反している。施文方法はＩａ類同様、外面は口縁端部をベルト状に残し、以下横位に山形押型文を施している。内面は、原体条痕を縦位に施し、以下横位に山形押型文を施している。（１４）

Ⅱｂ類　口縁部は直行し、外面には縦位の山形押型文を施し、内面には口縁端部に棒状のもので連続刺突を施し、その下に横位の山形押型文を施すもの。（１３）

Ⅱｃ類　口縁部は大きく外反し、外面及び内面口縁部に山形押型文を施すもの。施文方向は、外面が縦位、内面が横位である。（１５・１６）

Ⅱｄ類　口縁部は出土していないが、大型の山形押型文を施すもの。
施文方向は縦位である。（１７）

塞ノ神式土器（第９．１０図１９～４１）

塞ノ神式土器は、全体の３３％を占め本遺跡の主体をなしている。塞ノ神式土器も押型文土器同様礫群に伴って出土している。文様はバラエティに富んでいるが、いずれも小片で口縁部と胴部の関係を明確になることはできなかった。よって、器形及びモチーフによって口縁部を７つに、胴部を５つに分類した。

口縁部

Ⅰ類　口唇部に刻目を施し、口縁部に凹線によって曲線や直線を描くもの。（１９～２１）

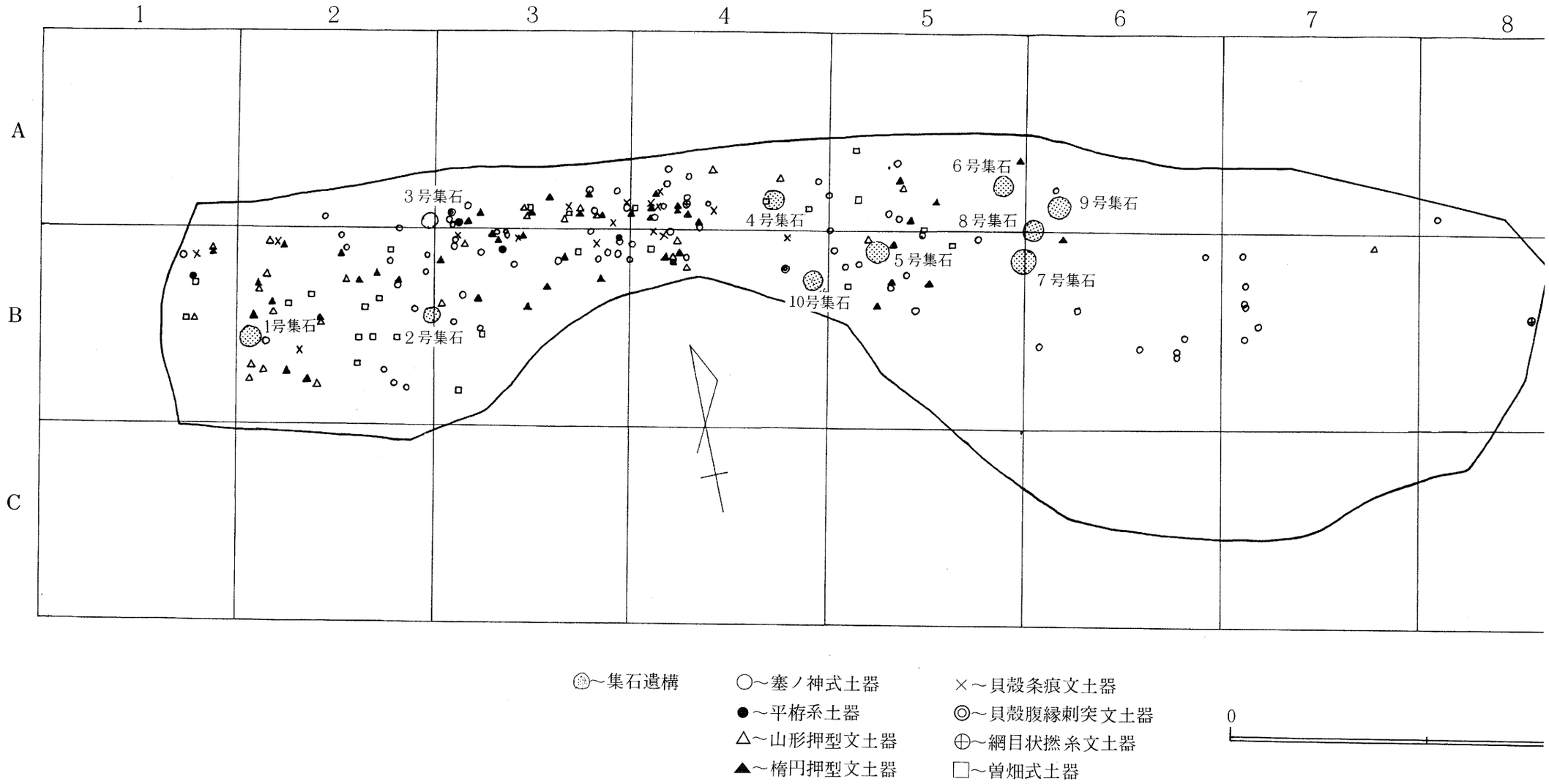
Ⅱ類　口縁部は大きく外反し、短い。口唇部に刻目を施し、口縁部に２本単位の凹線文と爪形の連続刺突文を施すもの。くびれ部にも爪形の連続刺突文を施している。（２３）

Ⅲ類　口縁部は大きく外反し、短い。口唇部に刻目を施し、くびれ部に１列爪形の連続刺突文を施すもの。（２４）

Ⅳ類　口縁部は大きく外反し、口唇部は尖りぎみである。口縁部に凹線文と爪形の連続刺突文を施すもの。（２５）

Ⅴ類　口縁部は大きく外反し、短い。口唇部に刻目を施し、口縁部に３列の三角形状の連続刺突文を施すもの。（２６）

Ⅵ類　口縁部は大きく外反し、口縁部からくびれ部にかけて幾条かの微隆起突体文を施し、そのうえに刻目を施すもの。（２７）



第７図　Ｂ地点縄文時代遺構及び遺物分布図

Ⅶ類　頸部で大きく外反し、中ほどで内湾状に屈曲するいわゆる二重口縁を呈した口縁部で、口唇部は刻目、外面屈曲部は刺突を施し、口縁部はジグザグ状及び横位の凹線文が施されているもの。　（２２）

胴　部

Ⅰ類　凹線を幾何学的に施しているもの。（２８）

Ⅱ類　無文帯を挟んだ縦位の撚糸文の上から凹線文帯と刺突文を横位に施しているもの。（３１）

Ⅲ類　幅１．５cm程の縦位の撚糸文を５～６本束にした撚糸文帯と無文帯とを交互に施文するもの。（３２）

Ⅳ類　縦位の撚糸文の上から斜位及び横位の凹線文帯を施すもの。　（３３）

Ⅴ類　無文帯を挟んだ縦位の撚糸文の上から凹線文帯を施すもの。　（３４～３６・４０）

Ⅵ類　平行する凹線ないに撚糸文を施すもの。（３７～３９）

平栫系土器（第１０図３０）

わずか１点のみである。３０は胴部で、横位及び渦巻状の凹線文と刺突文で文様が構成されている。器厚は薄い。

網目状撚糸文土器（第１０図４２・４３）

網目状撚糸文土器は全体の２％で極小量である。器形的には口縁部が外反し、外面及び内面口縁部に網目状に撚糸文を施している。施文方法としては、棒状のものに撚糸をＸ状に巻きつけたもので回転施文したものである。（４２・４３）

貝殻腹縁刺突文土器（第１０図４４）

貝殻腹縁刺突文土器も網目状撚糸文土器同様全体の３％と極小量で、口縁部は直行し、外面全体にジグザグ状に連続刺突文を施している。薄手の土器である。（４４）

曽畑式土器（第１１図４５～５６）

曽畑式土器は、アカホヤ層上部及び上層から出土している。

口縁部の形状は、おおむね２種類に分類することができ、短く「く」字状に大きく外反するもの（４５・５１）と内傾するもの（４６～５０）に分かれる。

口唇部にはほとんどのものが刻目を有し、口縁部は、横位の短沈線文を施すもの（４６～４９）がほとんどで、わずかに押引文（４５）と斜位の沈線文（５１）及び綾杉状のもの（５０）がある。いずれも、内面口縁部に短沈線文等を施す。

胴部は、短沈線を縦位・横位・鋸歯状・綾杉状・「口」字状に単一の施文要素を用いて、幾何学的な文様を施している。

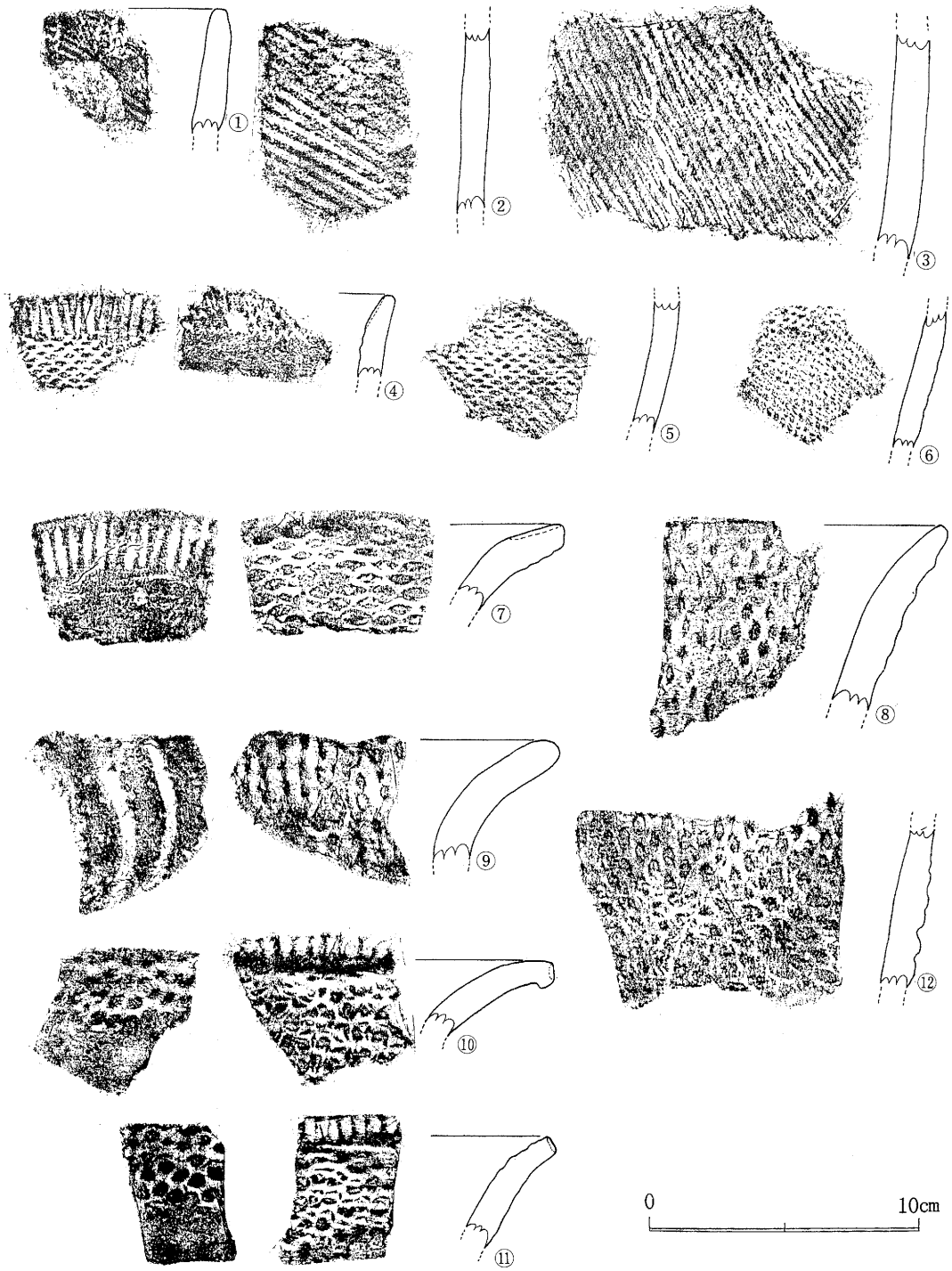
石　　器（第１３図７６～８５）

石器は、石匙２点・石鏃１０点・敲石６点が出土している。

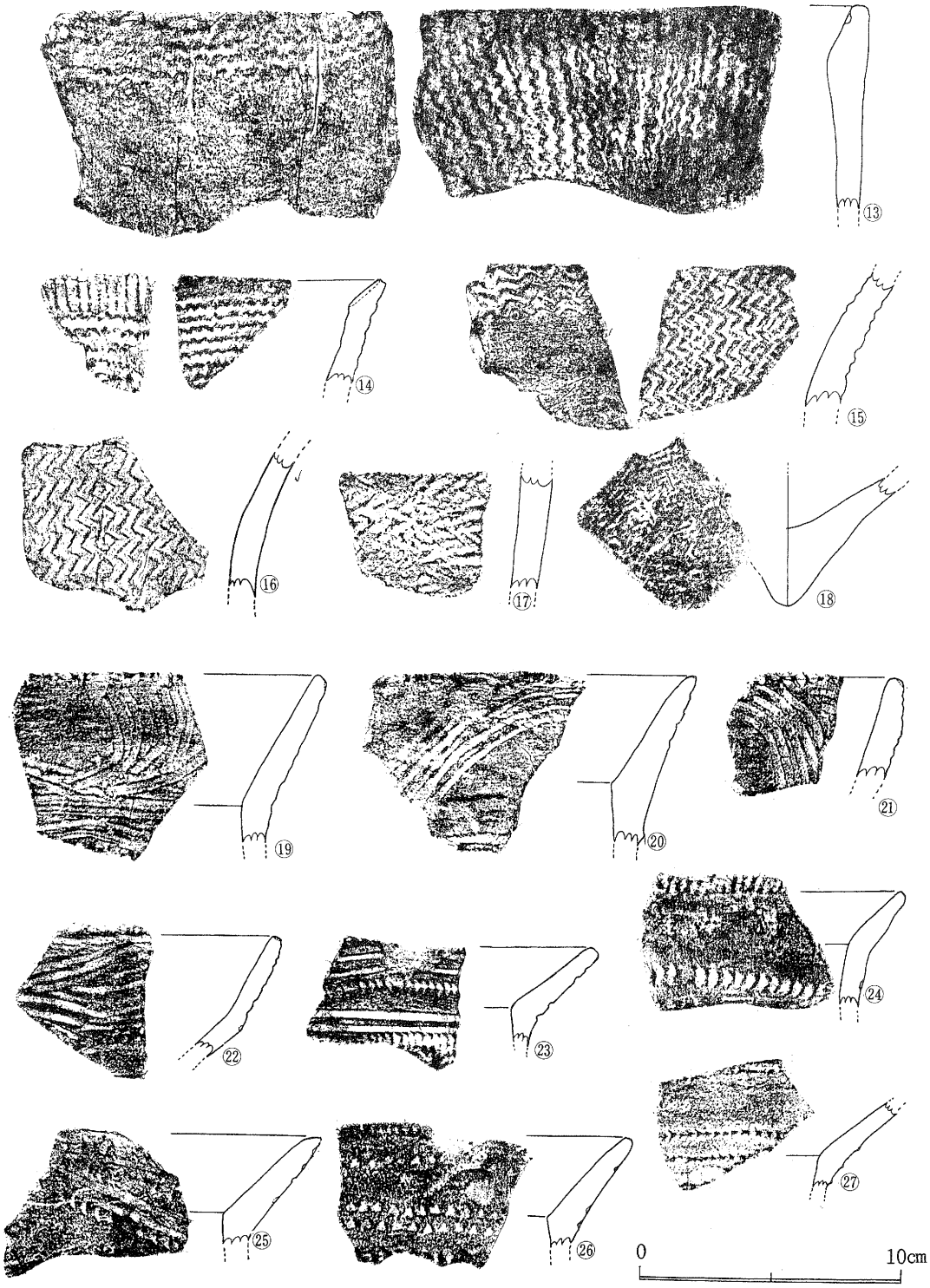
石匙は、方形の角部を抉入しつまみを設けているもの（８２）と長方形の長線側を抉入しつまみを設けているもの（８３）の２点が出土している。８２は縦３．４cm・横５．２cm・厚さ１cm、８３は縦４cm・横２．５cm・厚さ０．６cmで、石材はともにチャートである。

石鏃は、形態的には二等辺三角形（８０・８１）と三角形（７６・７７）が多く、その他弾丸型のもの（７８）や鍬形鏃と言われているもの（７９）もある。すべて無茎である。基部でみると、凹基式のもの（７～８０）と平基式のもの（８１）とがある。石材はチャートや黒曜石を使用しているが、中には頁岩製のものも含まれる。

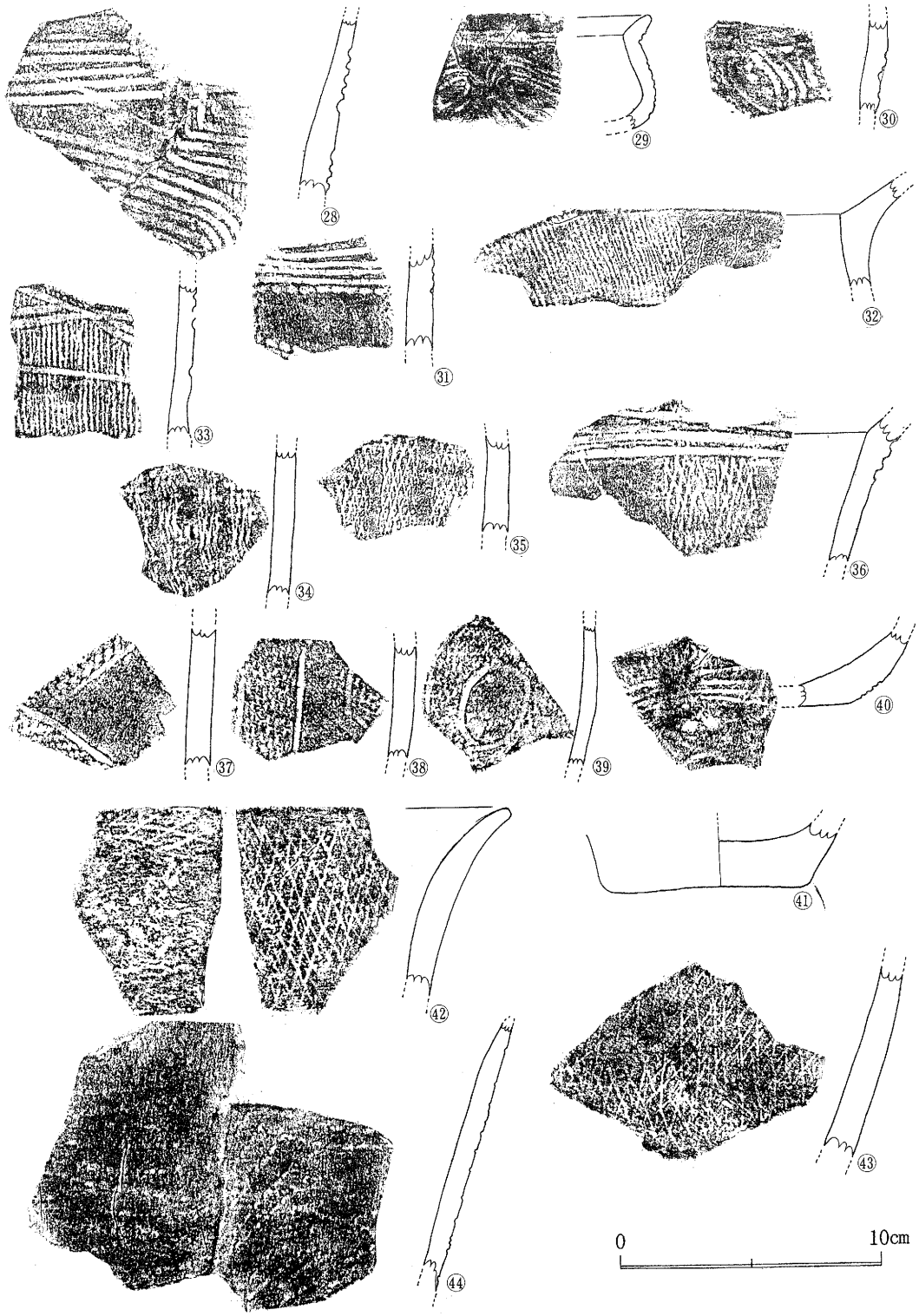
敲石は、形態的に円形のもの（８５）と楕円形のもの（８４）とがある。８４は長軸１１．２cm・短軸９．２cm・厚さ５．８cm、８５は直径９．２cm・厚さ６．７cmを計る。石材は砂岩を使用している。



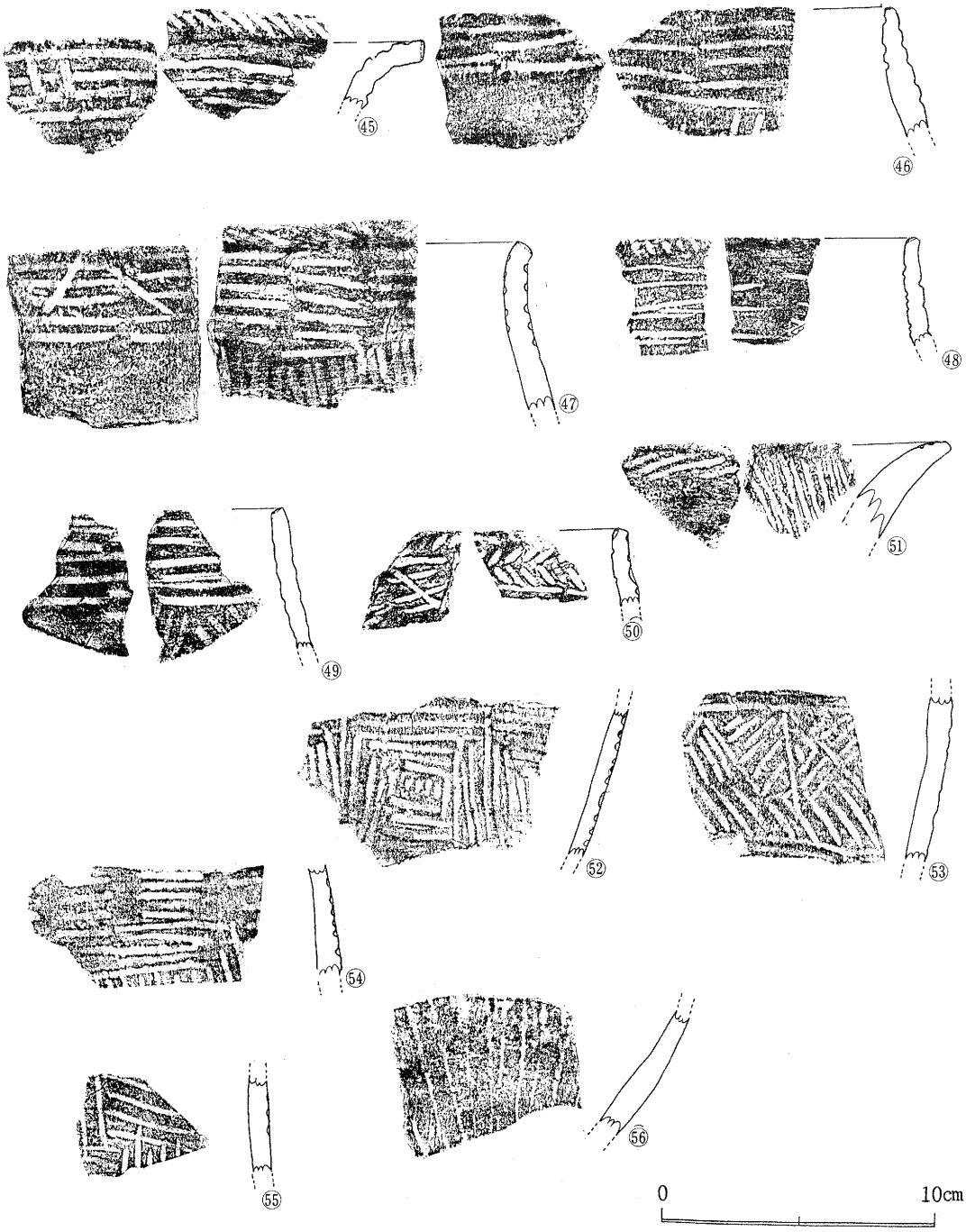
第８図　出土土器実測図・拓影（縄文土器）



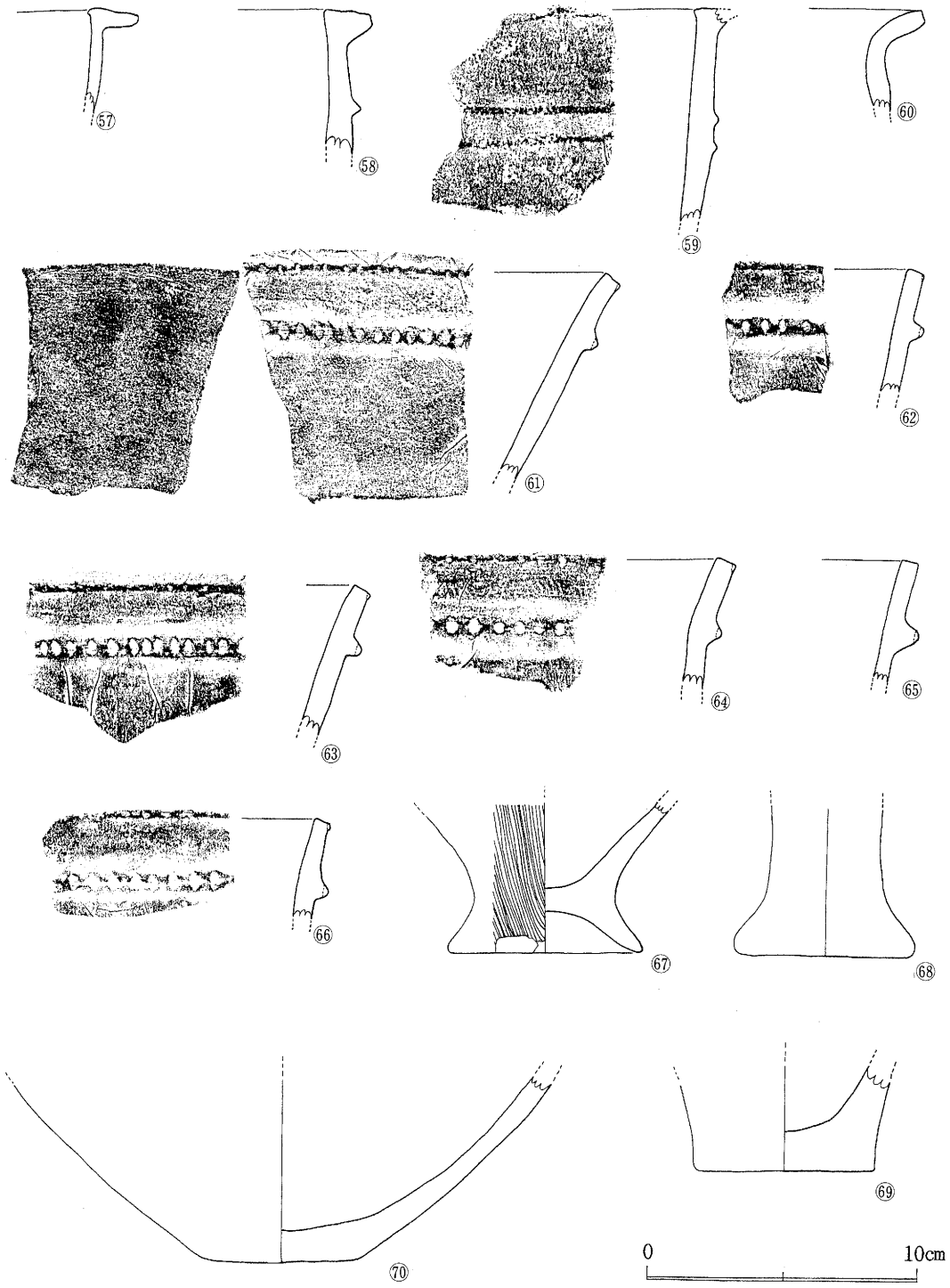
第９図　出土土器実測図・拓影（縄文土器）



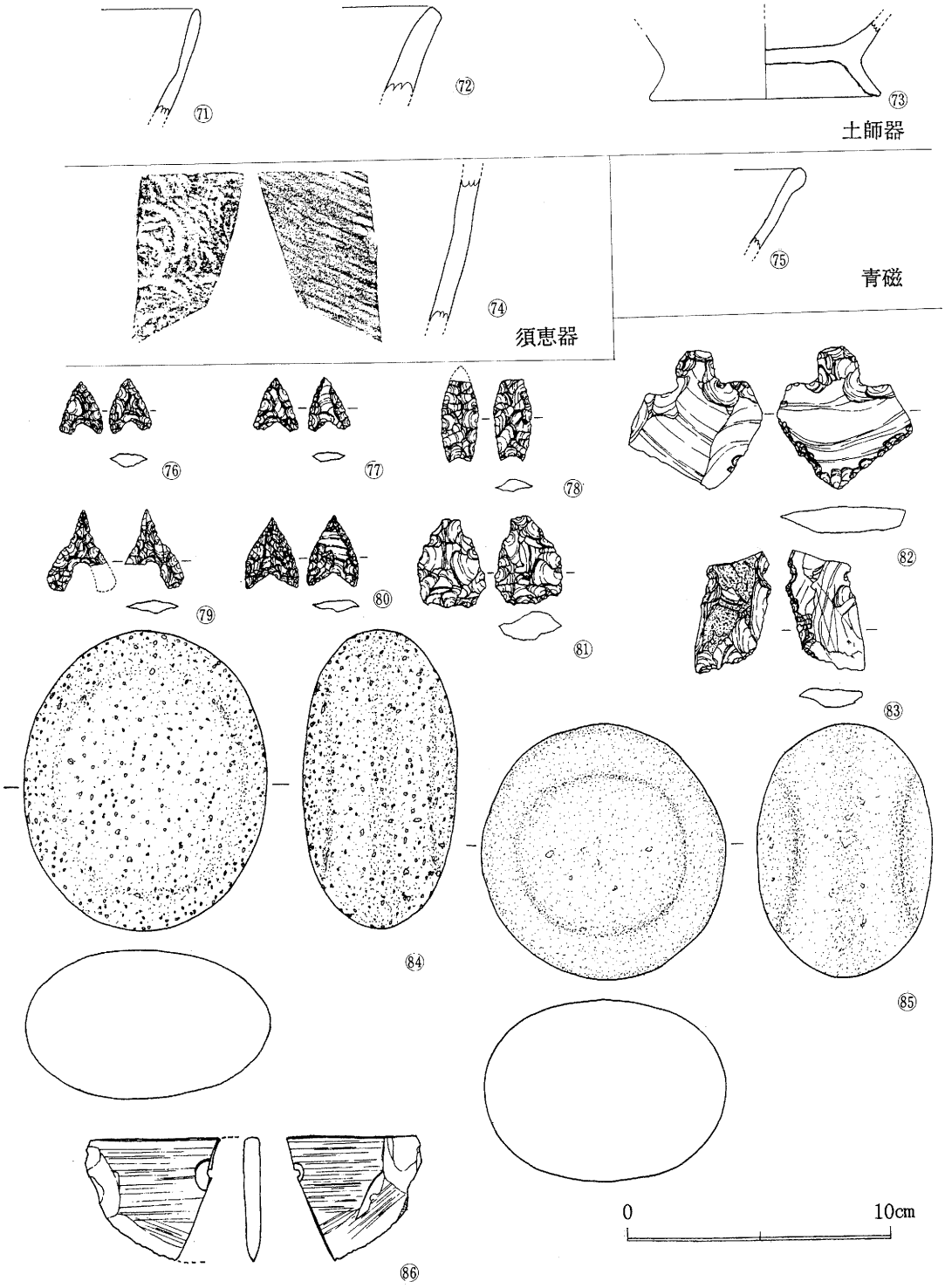
第10図　出土土器実測図・拓影（縄文土器）



第11図　出土土器実測図・拓影（縄文土器）



第12図　出土土器実測図・拓影（弥生土器）



第13図　出土土器・石器実測図及び拓影（土師器・須恵器・青磁・石器）

表1　縄文土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	縄文及び調査 外面	縄文及び調査 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第8図	1	深鉢	口縁部	貝殻腹縁刺突文 貝殻条痕文	ヨコナデ	良好	灰褐 5YR5/2	灰褐 5YR5/2	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	2	〃	胴部	ななめの貝殻条痕文	風化著しく不明	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	
〃	3	〃	〃	〃	ナデ	〃	明赤褐色 25YR5/6	明赤褐色 25YR6/6	5㎜以上の小石を含む	
〃	4	〃	口縁部	口縁上部ナデ 縦位の楕円押型	口縁部に縦位の連続刻目以下横位の楕円押型文	〃	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	5	〃	胴部	楕円押型文	ヨコナデ	〃	赤褐色 10YR4/4	赤褐色 10YR4/4	〃	小型の楕円文
〃	6	〃	〃	〃	〃	〃	明赤褐色 7.5YR5/6	明赤褐色 7.5YR6/6	〃	〃
〃	7	〃	口縁部	横位の楕円押型文	口縁部に縦位の原体条痕	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	口縁部が大きく外反
〃	8	〃	〃	縦位の楕円押型文	ナデ	やや不良	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/3	〃	施文の仕方が雑
〃	9	〃	〃	縦位の楕円押型文	縦位に長大の原体条痕	良好	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/6	5㎜以上の小石を含む	大型の楕円文
〃	10	〃	〃	口唇部に押圧刻目 楕円押型文	口縁部のみ横位の楕円押型文	〃	黄灰 2.5YR5/1	黄橙 2.5YR8/6	2㎜前後の砂粒を含む	口縁部が大きく外反
〃	11	〃	〃	口唇部に押圧刻目 横位楕円押型文	口縁部横位の楕円押型文 以下ナデ	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	黄灰 2.5Y4/1	〃	〃
〃	12	〃	胴部	楕円押型文	ヨコナデ	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	施文の仕方が雑
第9図	13	〃	口縁部	山形押型文	口縁最上部に棒状のもので連続刺尖を施し、その下に横位の山形押型文	やや不良	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 10YR4/2	〃	継痕あり目
〃	14	〃	〃	横位の山形押型文	口縁上部に縦位の連続刻み以下は横位の山形押型文	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	〃	
〃	15	〃	〃	縦位の山形押型文	口縁部に横位の山押型文	やや不良	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR3/1	〃	
〃	16	〃		山形押型文	ナデ	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	〃 金母雲多量に混入	
〃	17	〃	胴部	〃	ヨコナデ	〃	橙 5YR7/8	橙 5YR5/6	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	18	〃	頸部	〃	ナデ	やや不良	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色 2.5YR6/6	〃	
〃	19	〃	口縁部	口唇部に幾何学的な凹線文	ヨコナデ	〃	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	〃	尖底
〃	20	〃	〃	口唇部に幾何学的な凹線文、頸部に平行凹線	〃	〃	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	〃	

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第9図	21	深鉢	口縁部	口唇部に押圧刻目、口縁部に幾何学的な凹線文	ヨコナデ	良好	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	22	〃	〃	口唇部に押圧刻目、口縁部に幾何学的な凹線文 棒状のものによる刺尖文	ヨコナデ	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	褐灰色 7.5YR5/1	〃	二重口線
〃	23	〃	〃	口唇部に押圧刻目、口縁部に2本の平行凹線、その下に爪型の刺突文 頸部にも2本の平行凹線その下に爪型の刺突文	〃	〃	灰黄褐色 10YR4/2	橙 5YR6/0	〃	
〃	24	〃	〃		〃	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	〃	
〃	25	〃	〃	口縁部に爪型の刺突文と凹線文	〃	やや不良	褐灰 10YR5/1	灰黄褐 10YR5/2	〃	
〃	26	〃	〃	口唇部に押圧刻目 口縁部と頸部に三角形状の刺突文	〃	良好	灰黄 2.5Y7/2	暗灰黄 2.5Y5/2	〃	穿孔あり
〃	27	〃	〃	小さな突帯に刻目 ヨコナデ	〃	〃	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/2	〃	幅2㎜の小さな突帯
第10図	28	〃	胴部	渦巻状の凹線文 刺突文	〃	〃	褐灰 7.5YR5/1	にぶい褐色 7.5YR5/4	〃	
〃	29	ミニチュア		頸部に3本の平行凹線文 胴部～底部に幾何学的な凹線文	〃	〃	にぶい黄橙 10YR5/3	橙 7.5YR6/6	〃	
〃	30	深鉢	胴部	幾何学的な凹線文と刺突文	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	〃	
〃	31	〃	〃	平行凹線文・刺突文 縦位の撚糸文	〃	〃	橙 7.5YR6/0	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	
〃	32	〃	頸部	平行凹線文 縦位の撚糸文	〃	〃	灰黄褐色 10YR6/2	橙 7.5YR7/6	〃	
〃	33	〃	胴部	凹線文 縦位の撚糸文	〃	〃	暗灰黄 25Y7/2	明黄褐色 10YR7/6	〃	
〃	34	〃	〃	縦位の撚糸文	〃	〃	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	
〃	35	〃	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	明黄褐色 10YR6/6	〃	
〃	36	〃	頸部	頸部に2条の平行凹線文 胴部に横位の撚糸文	〃	〃	にぶい橙 7.5YR5/4	橙 5YR6/6	〃	
〃	37	〃	胴部	凹線内に撚糸文 ナデ	〃	やや不良	橙 5YR6/6	黄橙 7.5YR7/8	〃	
〃	38	〃	〃	凹線文 縦位の撚糸文	〃	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	明黄褐色 10YR7/3	〃	

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
	39	深鉢	胴部	凹線文 縦位の撚糸文	ヨコナデ	良好	にぶい橙 10YR6／9	にぶい黄橙 10YR6／4	2㎜前後の砂粒を含む	凹線内に撚糸文
	40	〃	底部	3条の平行凹線文 縦位の撚糸文	〃	やや不良	橙 5YR7／6	橙 5YR7／6	〃	平底
	41	〃	〃	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 7.5YR8／6	暗灰黄 2.5Y5／2	〃	
	42	〃	口縁部	網目状の撚糸文	口縁部のみ網目状撚糸文	やや不良	浅黄 2.5Y7／4	浅黄 2.5Y7／4	〃	
	43	〃	胴部	〃	ナデ	〃	〃	〃	〃	スス付着
	44	〃	口縁部	ジグザグ状の刺突文	ヨコナデ	良好	浅黄 2.5Y7／3	にぶい黄 25Y6／3	〃	貝殻腹縁
第11図	45	〃	〃	口唇部に刻目 口縁部に押引き文	口縁部に平行短沈線文	〃	明赤褐色 2.5YR5／8	橙 5YR6／0	〃	口唇厚大
〃	46	〃	〃	口唇部に押圧刻目 口縁部に平行短沈線文 胴部に幾何学的な沈線文	口縁部のみ平行短沈線文 ヨコナデ	〃	黄橙 7.5YR7／8	にぶい黄橙 10YR7／4	〃	
〃	47	〃	〃	口唇に刻目 口縁部に平行短沈線文 胴部に縦位の短沈線文	口縁部のみ平行短沈線文 ヨコナデ	〃	橙 5YR6／6	橙 5YR6／6	〃	
〃	48	〃	〃	口唇部に押圧刻目 口縁部に平行短沈線文	〃	〃	黄橙 7.5YR7／8	にぶい黄橙 10YR7／4	〃	
〃	49	〃	〃	口縁部に平行短沈線文 胴部に幾何学的な沈線文	口縁部のみ平行短沈線文 ヨコナデ	〃	にぶい黄橙 10YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／4	〃	
〃	50	〃	〃	口唇部に刺突 口縁部に刺突を施しく字状の沈線、その下に平行短沈線文	口縁上部に刻目、その下位に不規則な短沈線文 ヨコナデ	〃	にぶい黄橙 10YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／4	〃	
〃	51	〃	〃	縦位の沈線文	口縁部のみ斜め方向の沈線文 ヨコナデ	〃	にぶい赤褐色 2.5YR2／4	明赤褐色 2.5YR5／6	〃	
〃	52	〃	胴部	平行短沈線文 幾何学的な沈線文	ヨコナデ	〃	にぶい黄橙 10YR6／4	明黄褐色 10YR6／6	〃	
〃	53	〃	〃	〃	〃	〃	灰黄褐 10YR6／6	にぶい黄橙 10YR7／4	3〜5㎜前後の砂粒を含む	
〃	54	〃	〃	縦位の短沈線文 幾何学的な沈線文	斜め方向のハケ	〃	橙 5YR6／6	橙 5YR6／6	2㎜前後の砂粒を含む	
〃	55	〃	〃	幾何学的な沈線文	ヨコナデ	〃	にぶい黄橙 10YR7／4	橙 7.5YR7／6	〃	
〃	56	〃	底部	縦位の沈線文	ヨコナデ	やや不良	〃	浅黄 2.5Y7／3	〃	丸底とおもわれる

表2　弥生土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	縄文及び調査 外面	縄文及び調査 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
第12図	57	甕	口縁部	ナデ	ナデ	やや良好	灰褐 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	2㎜前後の砂粒を含む	口縁上部逆「く」字状の突帯
〃	58	〃	〃	〃	〃	良好	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃 その下部にも突帯
〃	59	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	やや不良	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3		口縁上部突帯欠損 その下部に2条の突帯
〃	60	〃	〃	ヨコハケ	ヨコハケ	良好	にぶい橙 5YR7/3	にぶい橙 7.5YR6/3	〃	「く」字状の口縁
〃	61	〃	〃	口縁部～ヨコハケ 胴部～たて方向のハケ	口縁部～ヨコハケ 胴部～ナデ	〃	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 5YR3/6	〃	口唇部に刻目 口縁部に刻目突帯
〃	62	〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ	〃	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/3	〃	口唇部に刻目 口縁部に刻目突帯
〃	63	〃	〃	口縁部～ヨコハケ 胴部～斜め方向のハケ	ヨコハケ	〃	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	〃	〃
〃	64	〃	〃	ヨコハケ	〃	〃	橙 7.5YR6/6	〃	〃	〃 やや口縁が外反
〃	65	〃	〃	ナデ	ナデ	やや不良	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 10YR4/2		口縁部に刻目突帯
〃	66	〃	〃	ヨコハケ	ヨコハケ	良好	灰色 7.5YR6/2	灰色 7.5YR6/3	〃	口唇部に刻目 口縁部に刻目突帯
〃	67	〃	底部	斜め方向のハケ	ナデ	やや不良	灰色 7.5YR8/1	灰色 7.5YR8/1	〃	あげ底
〃	68	〃	〃	ナデ	〃	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	明褐色 5YR7/2	5㎜前後の小石を含む	柱状で脚台
〃	69	〃	〃	たて方向のハケ	ナデ	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/3	〃	平底
〃	70	壺?	〃	ハケ	風化著しい	不良	にぶい橙 7.5YR7/3	?	2㎜前後の砂粒を含む	平底

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１.遺　　構

弥生時代の遺構は検出できなかったが、Ｂ地点西側Ｂ－２グリットを中心にして弥生時代の甕形土器等が出土しており、遺構の存在が推定される。

２.遺　　物

弥生土器（第１２図５７～７０）

甕形土器がほとんどで、口縁部にほぼ水平の張り出しの強い突帯を巡らし、逆「Ｌ」字状を呈するもの（５７～５９）・「く」字状を呈するもの（６０）及び口縁下部に刻目突帯を施す下城式系のものが出土している。67･68（高い柱状脚台）は口縁部に水平の張り出しの強い突帯を巡らす甕、６９は下城系甕の底部と思われる。

７０は壺形土器の底部と思われるが、両面とも風化が著く、詳細については不明である。

石　器（第１３図８６）

石包丁が１点出土している。８６は半折損の半月形の石包丁で、刃部は鋭利で両面のほぼ全面に横方向の研磨痕をみる。中央部に孔を穿った砂岩製のものである。現存長５㎝・現存身幅４．７㎝・厚さ０．６㎝を計る。

第３節　古墳時代以降の遺構と遺物

１.遺　　構

古墳時代以降の以降は、土坑２基・溝状遺構２条・粘土質の硬い土を固めて帯状に施した遺構が検出されているが、この帯状の遺構については用途等不明な点が多く、何の遺構であるかは判断がつかない。

土　坑（第４図）

土坑は当初数基検出されていたが、浅く変形しているものが多く、不思議に思っていたところ、それは風倒木の作用によって天地が逆になり、土坑状になったものであるとのご教示を県文化課・面高哲郎氏より得た。よって、再度検討した結果、土坑はＢ地点中央部１基（１号）と東側１基（２号）の２基となった。１号土坑は、直径１．１ｍ、深さ１．６５ｍの円形プランを呈している。遺物は伴っていない。２号土坑は、長軸１．３ｍ、短軸０．９ｍ、深さ１．５５ｍの楕円形状を呈している。遺物は伴っていない。

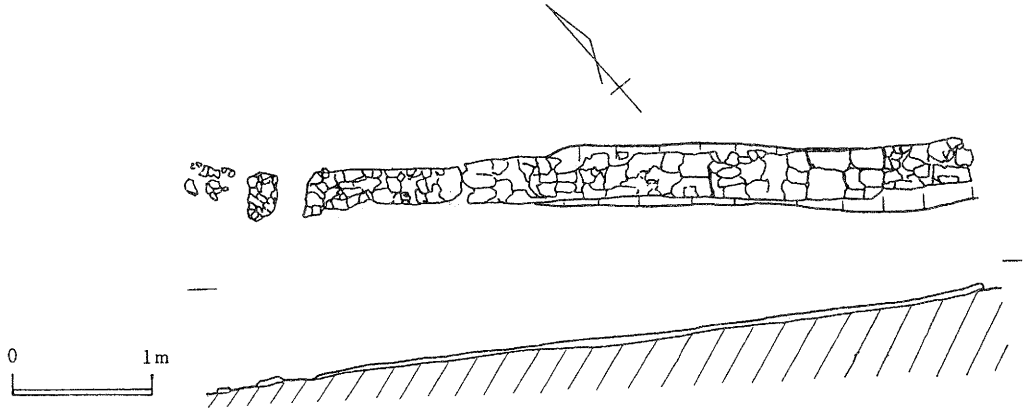
溝状遺構（第３図）

土坑同様Ｂ地点中央部に１本（１号）と東側に１本（２号）の２条検出された。１号溝状遺構は、

幅０．７ｍ・現存長１０．０ｍ・深さ０．３ｍ、２号溝状遺構は、幅０．６～０．７ｍ・現存長１８．０ｍ・深さ０．１１ｍで、両遺構ともアカホヤ層上面で検出されている。遺物は、伴っていない。

帯状の遺構（第１４図）

Ｂ地点東側から検出された。幅０．３５～０．４ｍ・現存長５．７ｍ厚み０．０３～０．０５ｍ・堀り込みの深さ０．１ｍで、きれいに粘質の硬い土で帯状に底面を作り出している。



第14図　Ｂ地点帯状の遺構実測図

土塁・掘跡（第１５図）

当遺跡のある中ヶ原台地は、中世・中原城があったところで、岩郷原台地から張り出した当台地は西・東・南方が断崖になっており、それが外堀となって防護の役割を果たしている。しかし、北方は岩郷原台地とつながっているため無防備であり、よって、そのくびれ部に土塁及び堀を設けて敵の侵入を防いでいる。

土塁は、現在２５ｍ程残存しているが、調査の結果、土層の状態等から平坦地の内側を削り取り土塁状にしたことが確認された。つまり、ほとんど盛土せずに、自然の地形を削平して形成されていた。

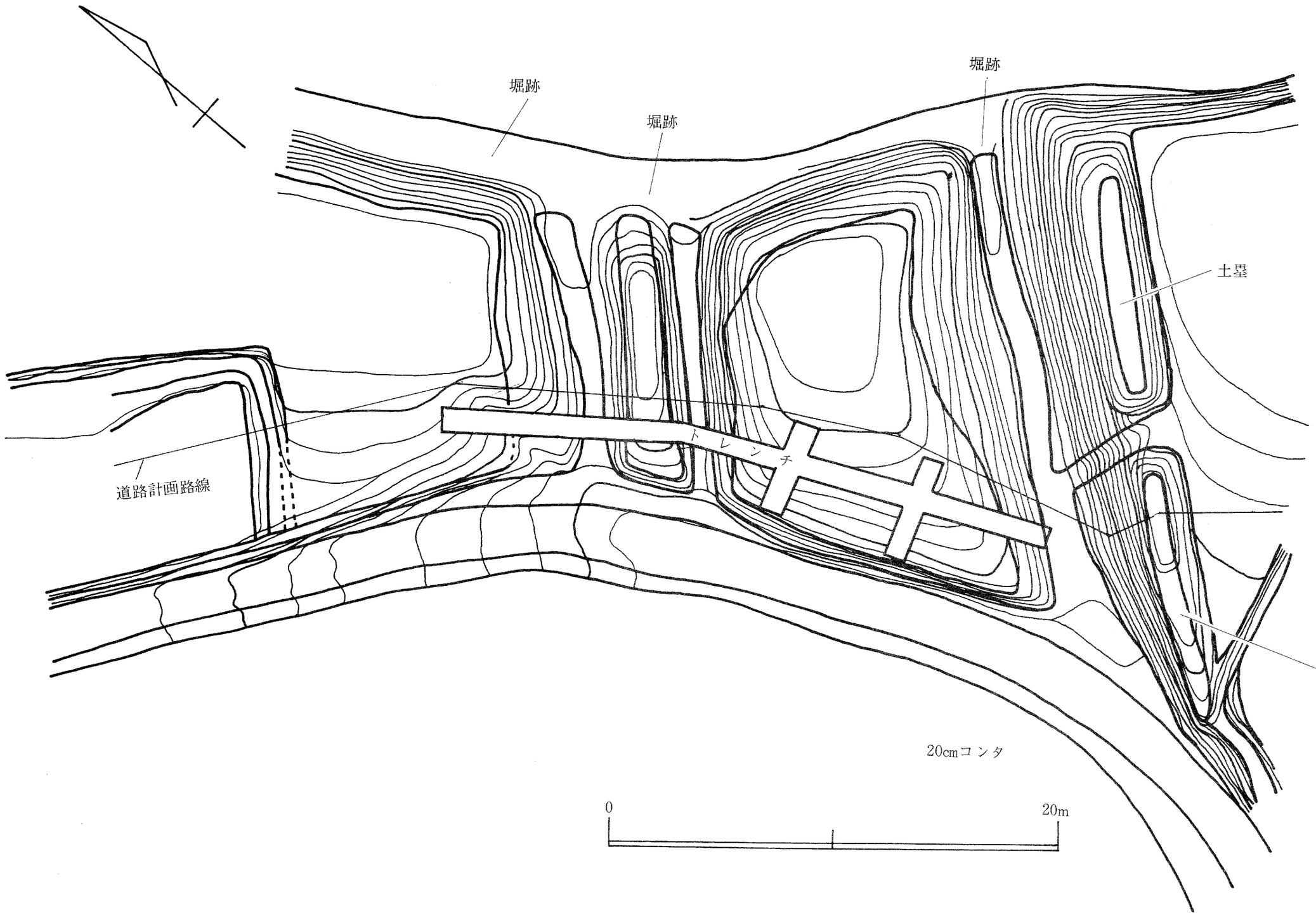
堀跡は当初２本と思っていたが、調査の結果、３本であることが確認された。外側の堀跡はＶ字状の小さな堀跡で幅１．２５ｍ・深さ０．７ｍ・現存長１２ｍ、まん中の堀跡はＵ字状の小さく、幅２．５ｍ・深さ１．１ｍ・現存長１２ｍ、内側の堀跡は他２本の堀跡とは格段に違い幅約５ｍ深さ約３．４ｍ（土塁まで含めて）・現存長２５ｍを計る。

２.遺　物（第１３図７１～７５）

土師器６０点・須恵器１点・青磁１点が出土している。土師器はＡ地点及び攪乱されていたＣ地点を中心に、須恵器はＡ地点、青磁はＢ地点より出土している。いずれも小破片である。

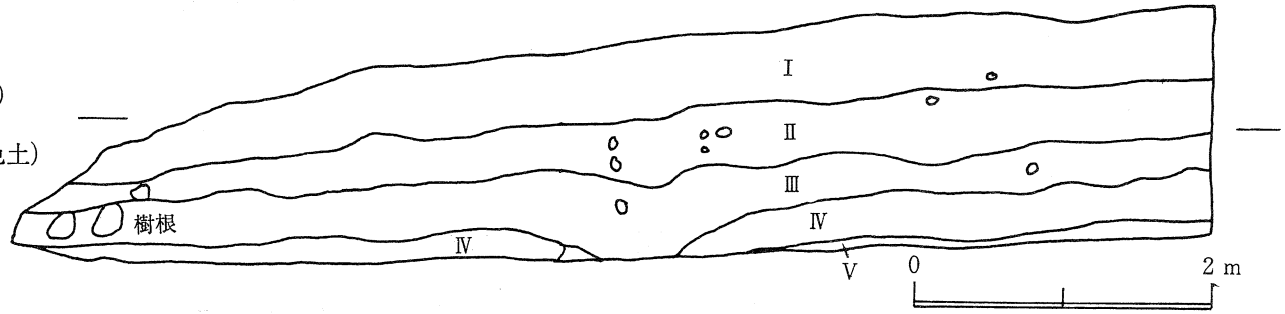
７１～７３は土師器で、７１は杯、７３は高台付杯、７２は甕の破片である。

７４は両面叩目を有する須恵器、７５は口縁部端が厚く、口唇部が丸くおさめられている青磁碗の破片である。

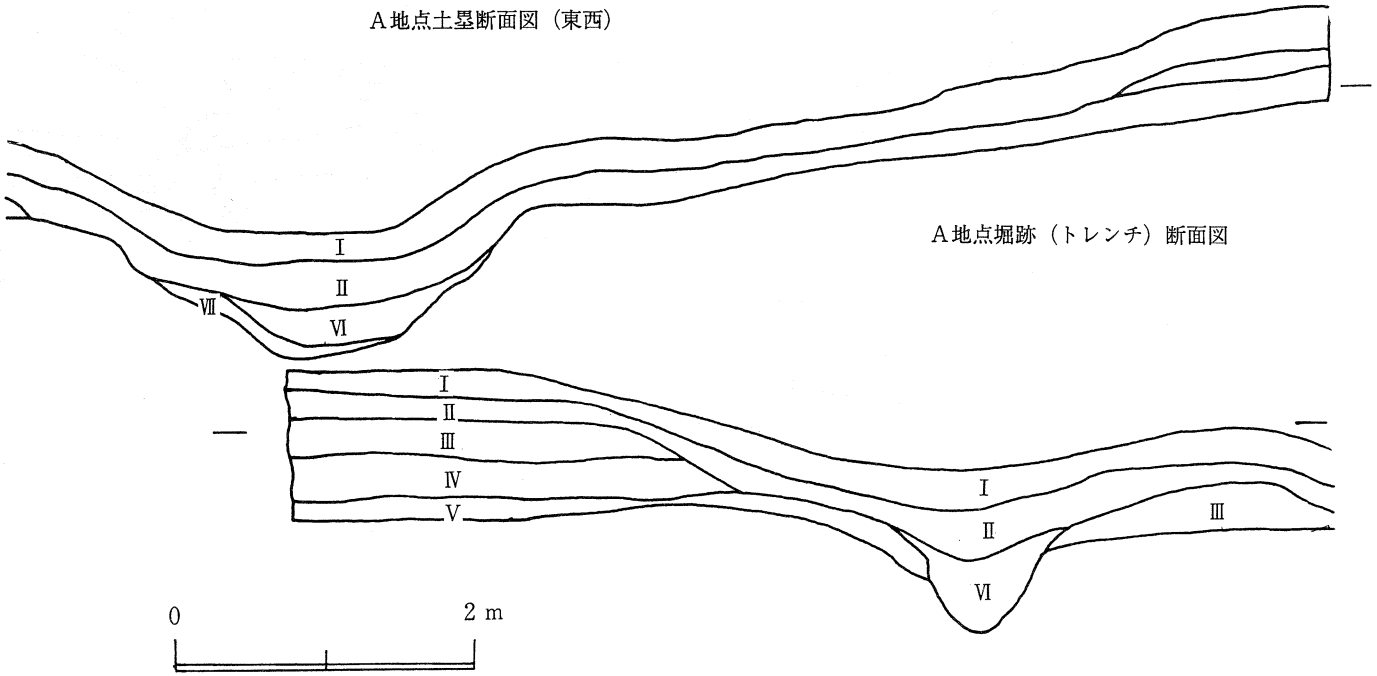


第15図　A地点平面図

Ⅰ～表土
Ⅱ～褐色土（10YR4／4）
Ⅲ～アカホヤ
Ⅳ～黒褐色土（10YR2／2）
Ⅴ～黄褐色土（10yr5／6）
Ⅵ～遺構内埋土（明黒褐色土）
Ⅶ～　〃　（褐色土）

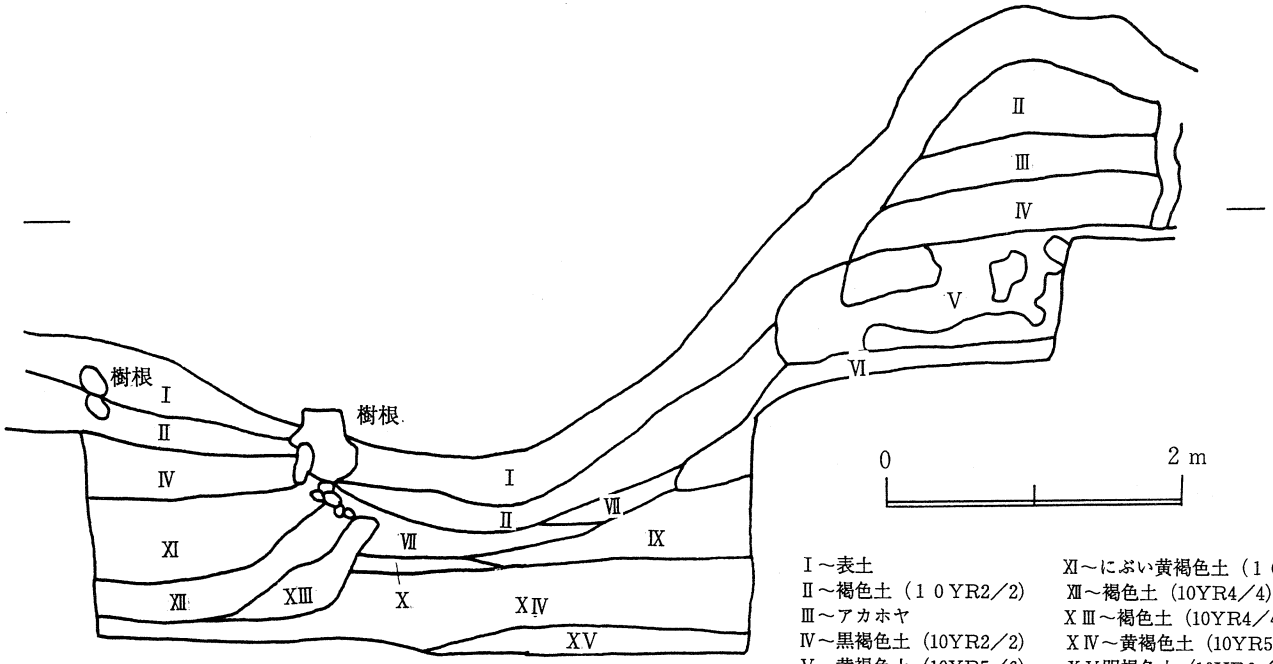


A地点土塁断面図（東西）



A地点堀跡（トレンチ）断面図

第16図　A地点土塁(東西)及び堀跡(トレンチ)断面図



Ⅰ～表土
Ⅱ～褐色土（１０YR2／2）
Ⅲ～アカホヤ
Ⅳ～黒褐色土（10YR2／2）
Ⅴ～黄褐色土（10YR5／6）
Ⅵ～黄橙土（7.5YR8／8）砂質であらい
Ⅶ～明黄褐色土（10YR6／6）
Ⅷ～暗褐色土（10YR3／4）
Ⅸ～灰黄褐色土（10YR4／2）・粘土質
Ⅹ～暗　〃　（10YR6／6）
Ⅺ～にぶい黄褐色土（１０ｙｒ４／３）砂質
Ⅻ～褐色土（10YR4／4）・砂質
ⅩⅢ～褐色土（10YR4／4）第2オレンジ
ⅩⅣ～黄褐色土（10YR5／6）ブロック混入硬質・粘質
ⅩⅤ明褐色土（10YR6／8）

第17図　Ａ地点土塁（南北）及び堀跡断面図

第3章　まとめ

中原遺跡は、今回の調査によって縄文時代早期・前期及び弥生時代中期以降営まれていた遺跡であることが確認された。特に遺物量の７０％以上も出土したアカホヤ下層の縄文時代早期にピークがあり、それに伴って集石遺構１１基も検出されている。

縄文土器[1]は、アカホヤ下層から押型文土器・塞ノ神式土器・平栫系土器・貝殻条痕文土器・貝殻腹縁刺突文土器・網目状撚糸文土器・アカホヤ上部及び上層から曽畑式土器が出土しているが、主体をなしているのは、押型文土器・塞ノ神式土器及び曽畑式土器であり、これらの土器を中心に展開していきたいと思います。

押型文土器は県内はもとより、東九州を中心に九州全域、さらには西日本各地にまで分布している土器群である。この押型文土器の分類・編年については大分県[2]を中心に作業が進められているが、現段階では「稲荷山式一早水台式一下菅生Ｂ式一田村式一ヤトコロ式一手向山式」という編年が示されている。この編年を中心にして本遺跡出土の土器群の位置づけをしてみたい。本遺跡の土器群は、ほとんど口縁部が外反し、外面の文様も押型文が粗雑になり、縦方向の回転により施文されていること、また、原体刻文も長く斜方向のもの（Ｉｄ類）もあることから田村式の時期に相当するものと思われる。しかし、中にはＩａ類やⅡａ類のようにわずかに口縁部が外反し、口縁部内面に短い原体刻文を口縁部に対して直角に施し、横方向に小型の押型文を施しているもあり、これらは下菅Ｂ式の時期に相当すると思われる。このように、本遺跡においては時期差をみることができたが、Ⅱｂ類のように内面最上部に棒状のもので連続刺突文を施しているもの等が出土しており、今後は時期差だけでなく地域性も考慮して検討して行かなければならないと考える。

塞ノ神式土器は、口縁部がラッパ状（「く」字状）を呈している等非常に個性の強い独特の形態を呈した土器で、九州全土から出土しており、九州を代表する縄文土器といえる。その塞ノ神式土器は、木村幹夫[3]氏によって注目され、その後多くの研究者によって取り上げられてきた。そのなかで、河口貞徳[4]氏は撚糸文系土器（Ａ式）と貝殻文系土器（Ｂ式）の２型式に分類し、さらに、それぞれの特色からＡ式をａ・ｂに、Ｂ式をｃ・ｄに細分した。その方法が現在も継承され使用されている。この分類に基づくと、本遺跡出土の塞ノ神式土器はほとんどＡ式で、Ｂ式は含まれていない。

しかし、最近では別の角度から、新東晃一[5]氏・木崎康弘[6]氏・多々良友博[7]氏等によって独自の考えが提示され、注目されている。

一方、塞ノ神式土器のようにラッパ状の口縁部を持つ土器に平栫式土器がある。この土器は、河口貞徳[8]氏によって設定された土器型式で、文様としては羽状文・刺突文・沈線文及び刻目突帯が施されている。

さて、この塞ノ神式・平栫式両形式土器の関連性については種々論議されているところであるが、最近では新東晃一[9]氏によって興味ある見解が提示されている。それは、塞ノ神式様式として三代寺式・塞ノ神式・鍋谷式土器、平栫式土器様式として石坂上式・栫ノ原式土器を取り上げ、その融合型式として木佐貫原式土器を設定され考えを展開されている点である。
本遺跡においても、先程塞ノ神A式として分類した中に平栫式土器様式の石坂上式・栫ノ原式土器に類似しているものがあり、今後はこれらのことをふまえながら、いろいろな観点から再検討しなければならないと思われる。

アカホヤ層上部及び上層からは、曽畑式土器[10]が出土しているが、この土器に伴った遺構は検出されていない。器形・文様構成等から曽畑式土器の終わりに近い曽畑Ⅲ式といわれているものが多いが、中には、しっかりとした文様構成の曽畑Ⅱ式といわれているものも含まれている。

その他の縄文土器のうち貝殻条痕文土器は前平式土器で、県内では芳ヶ迫第１遺跡[11]・札ノ元遺跡[12]・源藤遺跡[13]・田上遺跡[14]・浦田遺跡[15]・堂地西遺跡[16]等から出土している。貝殻腹縁刺突文土器・網目状撚糸文土器は、類例が少ないが、貝殻条痕文土器及び塞ノ神式土器との関連もあり注目される。県内では、貝殻腹縁刺突文土器が小山尻東遺跡[17]・東城原第２遺跡[18]・猪之椪遺跡[19]等、網目状撚糸文土器が瀬戸口遺跡[20]等から出土している。

集石遺構は、形態的な特徴としてほとんどの集石遺構が堀り込みを持つタイプであることがあげられる。さらに堀り込みを持つものは、わずかな堀り込みを有するもの（２～６号・８号）と深く堀り込みを有するもの（７号・９号）に分けられる。この２つのタイプは明らかに形態的な相違を示しているが、唯一堀り込みを有しない１１号集石遺構と考え合わせて、これが時間的な相違に基づくものなのか、用途の相違によるものなのか検討しなければならない問題である。ただ、共伴土器として、縄文時代早期の早い時期に位置づけられる貝殻条痕文土器、さらには縄文時代早期後半に位置づけられる塞ノ神式土器等が出土しているので時間的な相違に基づくものなのかもしれないが、本遺跡においては検出基数がわずかであること、集石遺構内より遺物がまったく出土してなく共伴関係がはっきりしていないこと等から判断が困難である。

いずれの集石遺構も構成礫は角礫が中心で、堀り込み底面には偏平な川原石を配するタイプで、県内他遺跡同様の構成を示しているが、中には７号・９号集石遺構のように底面の川原石が著しく加熱され、赤色を呈しているものもある。いずれも深いタイプの集石遺構である。また、これら集石遺構の上部からは、広範囲に大量の角礫を中心として礫群が検出されている。この礫群については、現段階ではどういう状態の中で起こりうるものなのか、はっきり解明されていないし、また、集石遺構との関連性の問題と合わせて今後検討しなければならない大きな課題である。　弥生時代の遺構は、今回の調査においては確認されなかったが、Ｂ地点西側・Ｂ－２グリッドを中心に下城式系甕及び亀ノ甲式甕タイプの口縁部にほぼ水平に突帯を巡らし逆Ｌ字状を呈している甕等が出土しており、遺構の

存在が推定される。なお、これらの弥生土器については、石川悦雄[21]氏が宮崎平野における弥生土器編年試案を提示されたのをはじめ、長津宗重[22]氏が宮崎学園都市遺跡群出土土器を中心に後期～古墳時代初頭の土器を編年されるなど、積極的に編年作業が進められている。そういう中で、本遺跡出土の弥生土器は中期的様相をもつものが多く出土しているが、石川氏の編年によると、亀ノ甲タイプの甕は口縁部突帯が長くなり断面が長方形ないし台形を呈していることなどの特徴からⅡｂ期に、下城式系壷はⅡａ期とされている高鍋町持田中尾遺跡[23]の下城式系甕に類似していることからⅡａ期に相当される。しかし、中には口縁部が「く」字状を呈した後期的な様相を呈した土器もわずかではあるが含まれている。県内の同時期頃の遺跡は、前途した高鍋町持田中尾遺跡にほかに新富町鐙遺跡[24]等が知られているが、他時期の遺跡と比較すると割りと少ない。そういう中で、本年度西都市においては未報告ではあるが、串木遺跡[25]、上尾筋･下尾筋遺跡[26]からＶ字溝や住居址に伴って中期～後期の土器等が出土しており、これらの土器群と対比しながら相互関係・編年等再度検討しなければならないと思われる。

古墳時代以降の遺構は、円形土坑・溝状遺構・帯状の遺構及び土塁・堀跡がある。円形土坑・溝状遺構・帯状の遺構は、いずれも遺物は伴わないが、検出状況等から中原城に伴う遺構か、あるいはその後寺院も建立されいいることから、それに伴う時代の遺構であると思われる。

土塁・堀跡については、現在今回調査を行った中ヶ原台地のくびれ部と同台地北東部に形跡を見ることができるが、地元の人の話しによると中央部にも堀跡があったという。地形上くびれ部の土塁・堀跡は中原城の追手門部にあたると思われる。

遺物は、須恵器・土師器・青磁が出土している。須恵器・青磁はそれぞれ１点のみで判断に苦しむが、土師器は器形等から奈良時代頃のものと思われる。

以上のように本遺跡は、遺構や遺物によって縄文時代早期から中近世の長期間に渡って人間の生活の場として営まれていたことが確認された。そのなかには地域性を示すものも含まれており、今後研究するうえでは、貴重な資料を提供したものと思われる。

〈註〉

（１）縄文土器の分類については、県文化課・北郷泰道氏及び県史編纂室・日高孝治氏のご教示を得た。

（２）大分県『大分県史　先史篇Ⅰ』　１９８３

（３）木村幹夫「南九州に於ける縄文土器の一形式」『考古学』第４巻第５号　１９３３

（４）河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第６号　１９７２

（５）新東晃一「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』３　１９８２

（６）木崎康弘「熊本県大丸・藤ヶ迫遺跡の塞ノ神式土器について」『塞ノ神式土器』縄文集成シリー

ズ2　１９８５
（7）多々良友博「塞ノ神式土器群の文様構成一その分類と変遷の位置づけ一」『塞ノ神式土器』縄文集成シリーズ2　１９８５
（8）河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号　１９７２
（9）新東晃一「塞ノ神・平栫式土器様式」『縄文土器大観』1　１９８９小学館
(10) 中村愿「曽畑式土器」『縄文文化の研究』3　１９８２　雄山閣
(11) 田野町教育委員会「芳ヶ迫第1遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集　１９８６
(12) 田野町教育委員会「札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集　１９８６
(13) 宮崎市教育委員会「源藤遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』　１９８７
(14) 宮崎県教員委員会「田上遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集　１９８５
(15) 宮崎県教育委員会「浦田遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集　１９８５
(16) 宮崎県教育委員会「堂地西遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集　１９８５
(17) 宮崎県教育委員会「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集　１９８５
(18) 野尻町教育委員会「東城原第1遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第2集　１９８７
(19) 串間市教育委員会「猪之椪遺跡」『串間市文化財調査報告書』第1集　１９８７
(20) 新富町教育委員会「瀬戸口遺跡」『宮崎県児湯郡新富町文化財調査報告書』第4集　１９８６
(21) 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描（MK.Ⅱ）」『宮崎考古』第9号　１９８４
(22) 長津宗重「上ノ原遺跡」『国富町文化財資料』第4集　１９８６
(23) 北郷泰道「持田中尾遺跡」高鍋町教育委員会　１９８２
(24) 新富町教育委員会「鐙遺跡」『新富町文化財報告書』第2集　１９８３
(25) 誘致企業の工場設置に伴う事前調査において、弥生時代～後期の遺構・遺物等が検出された。
(26) 本年度西都市教育委員会において遺跡所在確認調査（市内遺跡発掘調査～国県補助）を実施したが、その調査において、弥生時代中期～後期にかけての遺構・遺物が多く検出された。

図　　版

(5) 藤本良造「鳥ノ巣式土地区画整理の特徴構成－その分類と実績の位置づけ－」『鳥ノ巣式土地区画整理の構成と特徴』文化出版局、1983.

(6) 河口盛保「海ノ森会」『建築雑誌』第6号 1973.

(7) 阪東成一「海ノ森小学校の特色」『筑波研究大観』1、1968小学館

(8) 中村重「海辺とトム」『海とふるさと建築』3、1983、鹿島出版

(9) 伊豆野町教育委員会『海ゃまの上遺跡』『伊豆野町文化財調査報告書』第2集 1986

(10) 大沢町教育委員会『大ノ丸遺跡』『伊豆野町文化財調査報告書』第3集 1986

(11) 白崎市教育委員会『国指定史跡 白崎城址』『白崎市文化財調査報告書』 1987

(12) 宮崎県教育委員会『原之遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 1985

(13) 宮崎県教育委員会『河田遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第5集 1985

(14) 宮崎県教育委員会『金崎古遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第1集 1985

(15) 宮崎県教育委員会『小田原遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 1985

(16) 宮崎県教育委員会『東遺跡第1遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 1985

(17) 神戸市教育委員会『原之橋遺跡』『神戸市文化財調査報告書』第1集 1987

(18) 宮崎県教育委員会『新川口遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 1986

(19) 宮崎県『宮崎平野における弥生～古墳時代遺跡分布調査（M.S.B）』『宮崎考古』第9号 1984

(20) 長谷川義『ヒノ原遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 1986

(21) 宮崎県立『埋蔵文化財調査報告』 宮崎県教育委員会 1983

(22) 都城市教育委員会『宮之原』『都城市文化財調査報告』第2集 1984

(23) 鹿児島県教育委員会『鹿児島県の遺跡』 鹿児島県教育委員会 1982

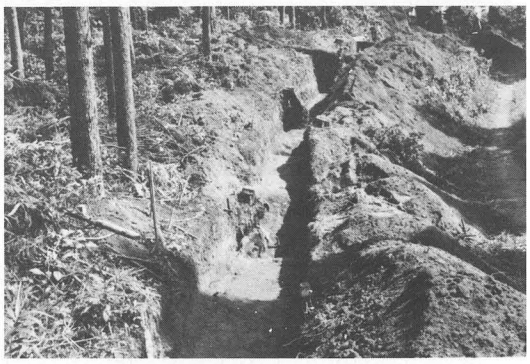
(24) 宮崎県教育委員会『宮崎県の遺跡』 宮崎県教育委員会 1983

(25) 本研究者は宮崎県教育委員会において遺跡分布調査（市内遺跡発掘調査－国指定史跡）を実施した。しかし、その調査において、弥生時代後期～古墳にかけての遺構・遺物が多く検出された。

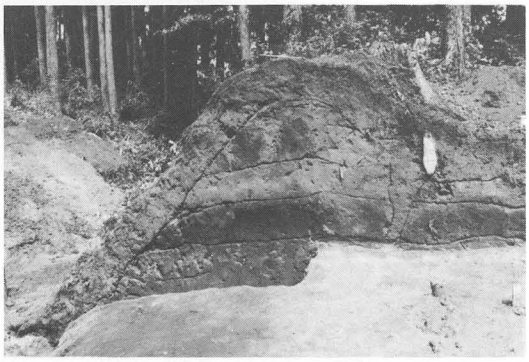
図 版1

中原遺跡遠景

Ａ地点近景（北側から）



Ａ地点堀（トレンチ）検出状況



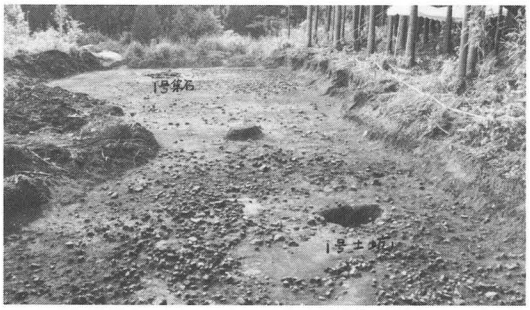
Ａ地点土墨縦断面

Ａ地点土墨横断面

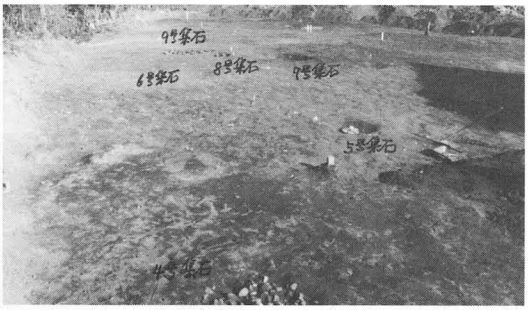
Ａ地点１１号集石遺構

図 版2

B地点近景（南側から）



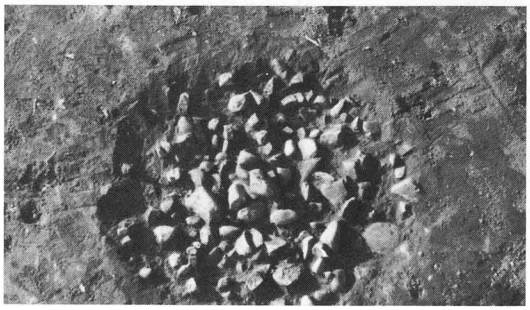
礫群検出状況



集石遺構分布状況

2号集石遺構

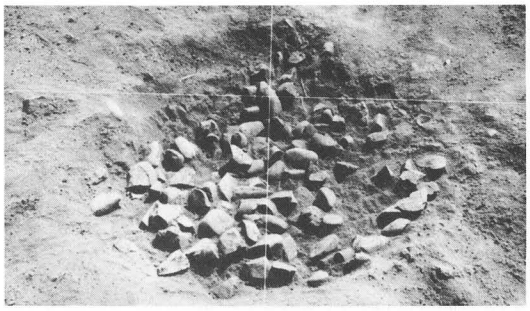
3号集石遺構



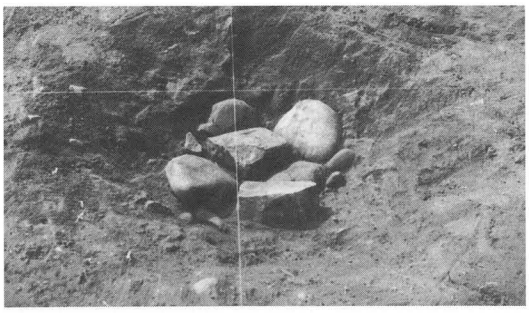
4号集石遺構

5号集石遺構

図 版 3

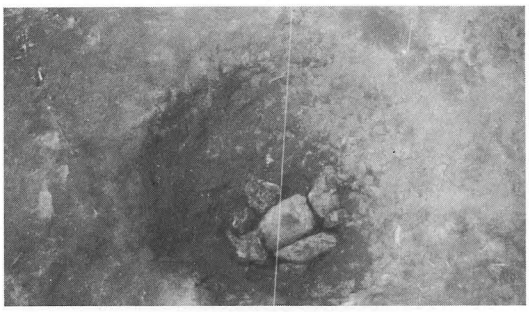


6 号集石遺構

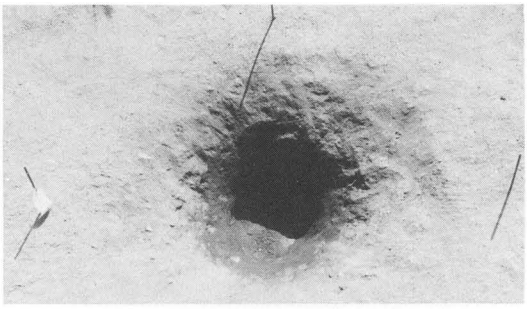


6 号集石遺構底面配石

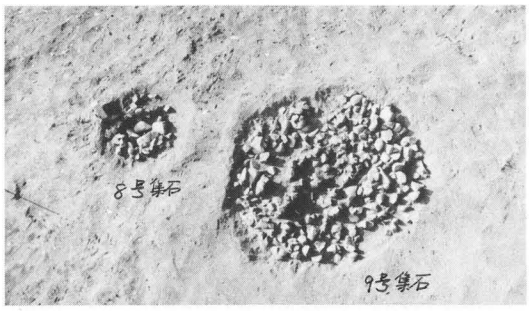
7 号集石遺構



7 号集石遺構底面配石

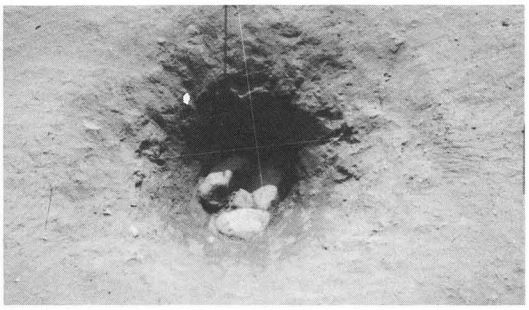


7 号集石遺構底面



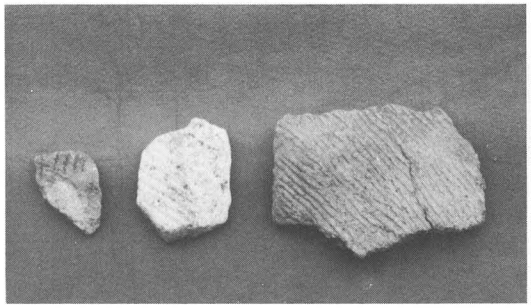
8 号・9 号集石遺構

9 号集石遺構下部

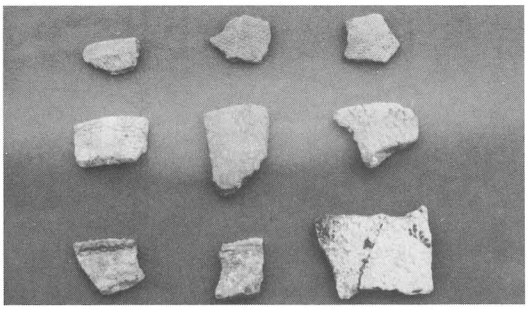


9 号集石遺構底面配石

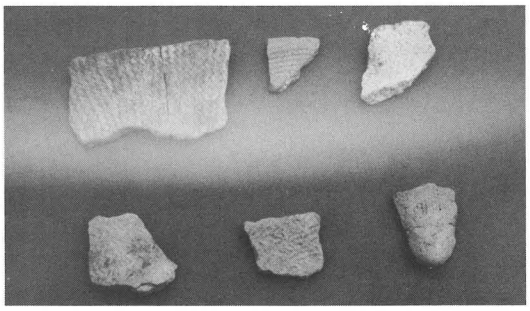
図 版4



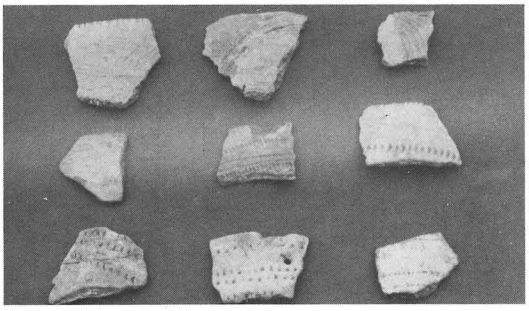
縄文土器　1～3



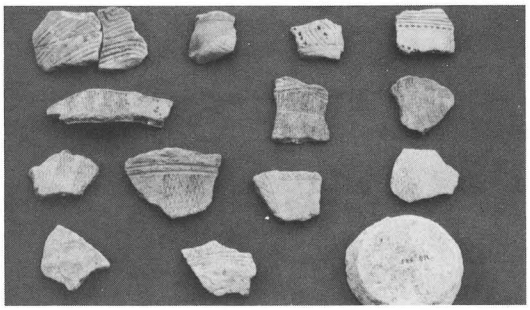
縄文土器　4～12



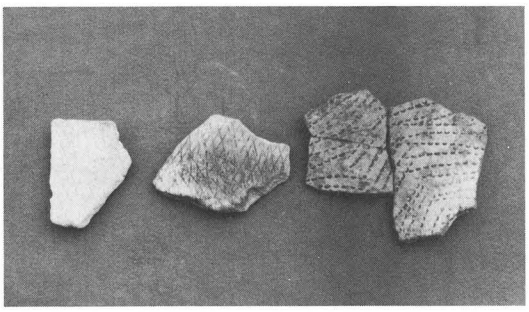
縄文土器　13～18



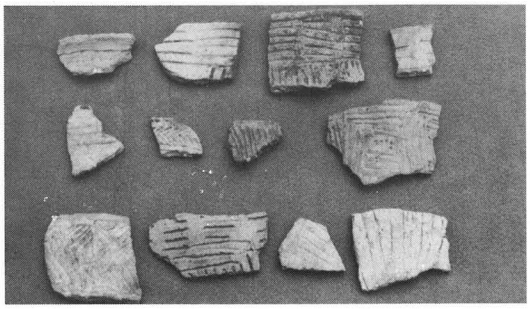
縄文土器　19～27



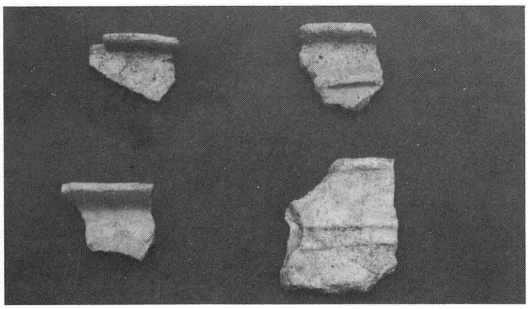
縄文土器　28～41



縄文土器　42～44

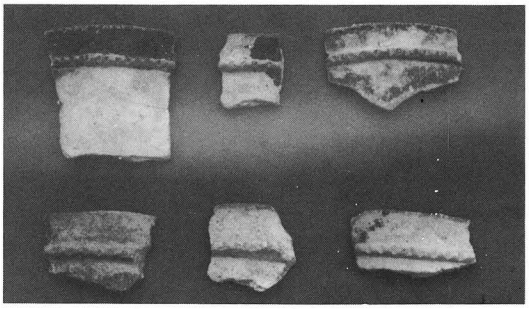


縄文土器　45～56

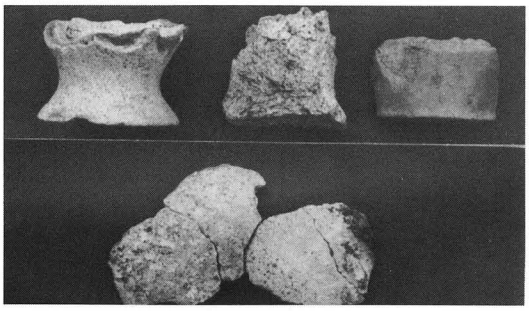


弥生土器　57～60

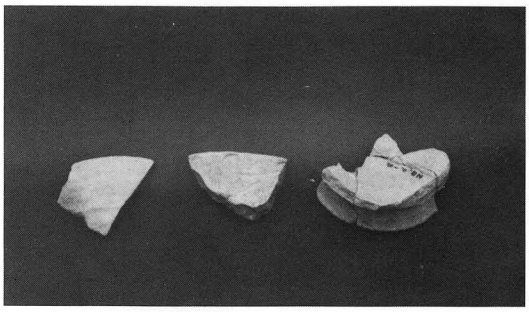
図 版5



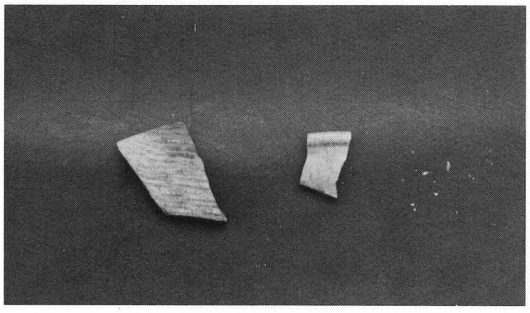
弥生土器　６１～６６



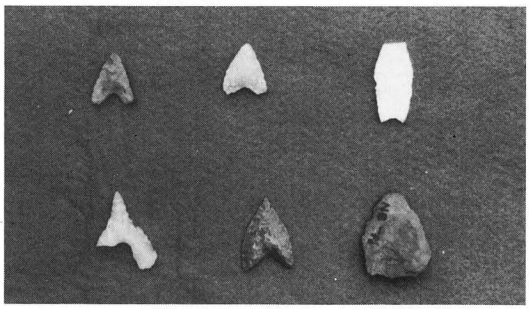
弥生土器　６７～７０



土師器　７１～７３

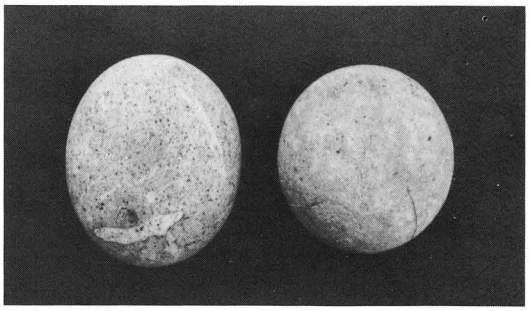


須恵器　７４・青磁　７５

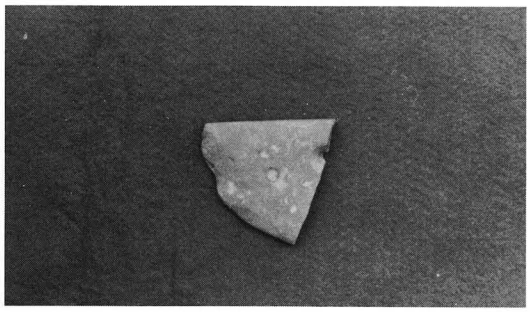


石器（石鏃）　７６～８１

石器（石匙）　８２・８３



石器（敲石）　８４・８５



石器（石包丁）８６

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書　第10集

平成２年３月３１日発行

編集発行　西　都　市　教　育　委　員　会

印刷所　な　か　む　ら　印　刷　所